

月刊もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

２０２１年１２月１日　第１０９号　第二版　　www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ:
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

「こどものころ、はじめて「非ユークリッド空間」というものの存在を知ったとき、私はひじょうな不安ととまどいを感じたものだった。私にはまだ、現実そのものと現実の説明とを、区別する方がなかったのだ。平行線が交わる世界と、交わらない世界とが、同じ一つの世界であり、それぞれその同じもののちがった説明にしかすぎないなどという考えにどうしてもなじむことができなかった。」

（「記録と写実」全集第７巻、１３９ページ）：１９５７年４月２１日）

非ユークリッド空間として箱男

［日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（５）：包む］

結局、私たちは、**包む、凹に入れる、仕切る**（切断ではない）、**通す、折りたたむ、仕舞ふ、窄（すぼ）める、巻く、絞**るのです。最初の包むから通すまでは幕の内弁当をつくるために必要な語彙でしたが、これらの中から最初の包むを今回は取り上げて、様子を見てみませう。これらの言葉はみなお互ひに通じてゐて、共通の意味は**一筆書き**といふことであるのでした。いつもながら、大先生、小先生に何糞君  に御登場願ひます。

小先生：包むといふのは、一体何を包むのありませうか？

大先生：おお、いい質問ですね。それは、あなた、包めるものなら何でも包むのですよ。それが日本人です。

小先生：百貨店の包装紙などは、その典型ですね。それに風呂敷も。何故に我らはこんなに包むことを愛するのであらうか。大風呂敷を広げる人もゐれば、さうだ、泥棒も昔は唐草模様の風呂敷に包んで盗品を担いでゐました。そして、首のところで紐のやうに風呂敷の先っちょを結んでゐましたね。

大先生：包むためには二次元の面でなければならないですね。これを一次元に落として包むことを結ぶといつてゐる。即ち、包むも結ぶも次元の違ひのあるだけで、行為としては同じことをしてゐると私たちは思つてゐるのです。折り紙を思へば、折ることも包むことの一種だと思ひ、包むことは折ることの一種だと思ひますね。それに確かに風呂敷は折り畳み、包装紙も一度開いた後は仕舞ふために折り畳みます。








小先生：折り目といふ目をつけて包むことが折りたたむことであれば、いや、大先生、あんた私の質問にまだ答へてゐないですぞ。何故に我らはこんなに包むことを愛するのであらうか。

大先生：それあ、あなた、その質問は、何故に我らはこんなに褌（ふんどし）を愛するのであらうか、と問ふに等しいですね。

小先生：Why?

大先生：即ち、何故に私たちのご先祖様は、フンドシといふ日本語に褌といふ漢字を当てたかといふことですよ。左偏は布といふ意味で良いでせうね。右の旁（つくり）の意味は、大砲といふ意味ですぞ、即ち大砲を包むのでフンドシといふのであります。この包みは性愛の道に一筋に繋がつてゐるといふわけですね。この間一筆書きといふ言葉を検索してゐたら、何かの拍子にYouTubeの動画サイトにポルノのサイトがありましたが、そのサ

『S・カルマ氏の犯罪』最後に登場する非ユークリッド空間を創造する映写機

イトの名前が、あなた、一本道といふのは、これは如何にも出来過ぎでしたね。我らのものも、やはり、あれは一本二本といふ単位で数へるのかね？
小先生：あなた、大先生、話が一寸逸脱し過ぎではありませんか？
大先生：いや、私は依然として、何を語つても糞真面目に位相の話である。なあ、何糞君  だから、江戸時代のあの素晴らしい浮世絵が生まれるわけですよ。今度浮世絵をトポロジーで解説致しませう。
小先生：本題に戻りませう。このまま行けば何でも一本道になりさうで、あたしあ、怖いでやんす。芭蕉の奥の細道が奥の一本道では困ります。芭蕉と曽良はいい仲だつたんでせうかね、大先生。
大先生：（全然話を聞いてゐない）さう、さう、包むと云へば、日本製の餃子は幾つもの餃子が皆くつついて接続された一本道であるな。即ち全体が１となつてゐるものを良く見るが、これに対して中華料理店の本格的な餃子はどうも皿に盛るだけであるな。これは時間の中の計算である足し算の料理であるからして、一筆書きのやうに次元が一つ上には参らぬ。大陸では土地が広いので幾らでも足し算を、島国では国土が狭いのでそもそも最初から掛け算といふことで御座候。





私たちはあのパリパリ感がいいなどと言つてゐるが、実はあのパリパリ感覚といふのは上位接続感覚の、私たちの存在感覚の聴覚的・味覚的表現なのではないかな？
小先生：なるほど、バリバリ感覚では、破壊感覚ですから、とてもぢやないが接続はできませんが、煎餅パリパリといふのは何か壊してゐるといふ感じが致しませぬなあ。バリカンなら直ぐにでも一気に坊主にされさうですが、パリカンではサッパリですね。あつ、やつパリ、さつパリと言つてしまつた。
大先生：今日はさつパリ、包む話に捗（はか）が行きませんね。
小先生：それあ、あなた、話が包む話だからですよ。私たちは煎餅の一枚一枚までも包装してしまふといふ、何とまあ、丁寧なる民族であらうことか。
何糞君：ツツミの話ばかりでは、話がこれ以上ススミませんから、これ韻を踏んだ洒落でござんす、此処で包みを解いてお開きにしませう。

（何糞君、出番がなかつたので沈黙す。）

もぐら通信

目次

0　表紙：日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（5）：包む
1　目次…page 3
2　記録＆ニュース＆掲示板…page 4
3　『周辺飛行』論（２２）：前回の最後にかかげておいた応用問題――周辺飛行１９：岩田英哉…page 9
4　リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５２）：第２部 XXVII：”本当に、時間は存在するのだろうか、この破壊するものは。”：岩田英哉…page １９
5　*Mole Hole Letter*（３０）：第三次世界大戦とは何か〜EXIT帝国対中華帝国の戦争〜：岩田英哉…page ２７
6　サンチョ・パンサを求めて（4）：ヨーロッパの環境問題終末思想カルト：岩田英哉…page ３１
7　ネット・メディア論（3）：４。ネット・モナド論：岩田英哉…page ４３
8　縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（２）：Intermezzo　何故日本にはキリスト教徒が１％しかみないのか？：岩田英哉…page ４７
9　編集後記…page ５８
１０　次号予告…page ５８

・連載物・単発物次回以降予定一覧…page ５６
・本誌の主な献呈送付先…page ５９
・本誌の収蔵機関…page ５９
・編集方針…page ５８

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ･シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

ニュース＆記録＆掲示板

The best tweets 10 of the month



Akult@Akult1984·8m
インストールしてる間に安部公房のなわを読んでたら、立ち小便が出てきた



漂識@HydroYourSeason·Nov 7
彼の小説、機能、つまり用具性が歩いているんですよ。そしてほとんどが名前を持たない、用具性と固有名詞を結び付けたがるオブジェクト指向的な考え方から離れた…そう、安部公房の文章は関数型言語的なのである。そこではfunctionが主役だ、functionを適用できる対象の一つに、人があげられるだけだ。

今月の上演

ポーランドってなんなの？@blogopolsce·Nov 7
ポーランドのワルシャワとポズナンで日本演劇祭開催(11/27~)
安部公房『友達』@ 劇団そばえ
岸田國士『紙風船』@ このしたやみ
チェーホフ『熊』@ このしたやみ
三島由紀夫『班女』@ 第七劇場
河田全休『サラリーマン狂言』@ オフィスKAJA
竹取物語『今は昔、かぐやのミッション』@ シアターX
豪華！



津あけぼの座・四天王寺スクエア@TsuAkebonoza·Nov 1
本日の四天王寺スクエアは、劇団そばえ　安部公房「友達」の仕込み。
三重ではなかなか見る事のできない、安部公房の戯曲作品、お楽しみください。公演は明日からですー！チケット予約受付中！



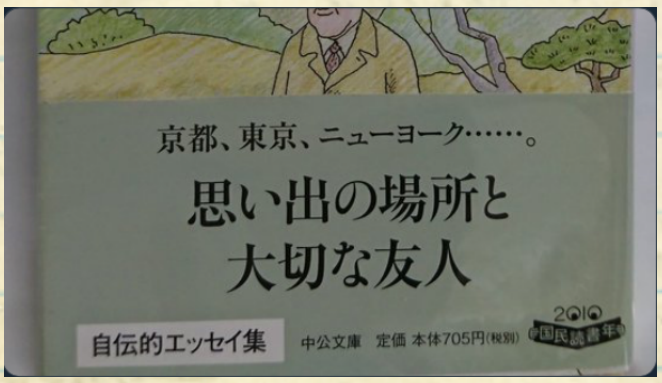
今月の終りし道の標に

ミィ@miyabidayon1987·Nov 5
はいw何気にプレオープンしてみた居酒屋
「終わりし道の標べに」by 安部公房
早速すリンク見てお客さんがw
ちなみに私は客どすｗｗｗ
http://sl-link.com/?webid=2688



今月のドナルド・キーン

ダイヤ@kongouseki4·Nov 7
ドナルド・キーン／私の大事な場所 #読了
キーンさんの自伝は結構読んできたので知っている話も多かったけどこれは新聞掲載原稿や講演等をまとめていて日本文学の研究内容も興味深い
数行なのに永井荷風宅を訪問した時の話大爆笑だし
安部公房等文人達とのお別れもホロッときちゃう
装丁が和田さん…



今月の下丸子（初期安部公房）

なつね🐥@summerpepu·Nov 2
ふつかめTOKYO
荻窪団地に喫茶モナミ跡に下丸子の安部公房関連地巡り



今月のなわ

兵隊@HEITAIs·23h
本日発売の週刊ファミ通を買ってきました
キャラクター解説に役者さんの経歴が入っていたり、センサーとして機能するオドラデクの元ネタや、監督が度々引用されている安部公房の『なわ』などの解説が! 世界観に触れる一冊でした。
#デスストでつながれ
#DeathStranding
#TomorrowIsInYourHands



missing31@missing31_GAME·5h
言うて小島秀夫監督は56歳か。SFや映画リテラシーの高さを考えるとそれなりの世代なんだろうとは思ってたが、素晴らしい作品が素晴らしいとされていた時代の人だからこそのデスストやな。今の若者にテッドチャンとか安部公房は通じないけど小島作品をきっかけに世界が広がるのは素晴らしいな。

三省堂書店有楽町店@yrakch_sanseido·Oct 29
小島監督最新作『DEATH STRANDING』をやる前に読んでおきたい一作、安部公房著の短編『なわ』が収録されている本はこちらです！！
（ＰＯＰも勝手に用意させて頂きました！小ネタもどこかに潜んでいる……？）



今月の安部公房英訳本

さわら@gotohi042·Nov 7
大学生協で傷物の洋書のバーゲンセールしてた。なぜか安部公房の英訳本がめちゃくちゃあって気になったけど、洋書って辞書引きながらだからめっちゃ時間かかって結局半分くらいで飽きてやめちゃうんよな、と思って今日はやめといた。



今月の安部公房詩

自分をご機嫌にするヒント@smile_one05·Nov 2

青空の向こうには
稲妻が駆け

暗転の空の上には
光が拡がる

目に映る事象だけを
信じていると

本質はいつまでたっても
藪の中

傷ついた過去を
経験と軽くあしらうより

内包したまま生きる道を
私は選ぶ



安部公房の世界に浸る夜｜smile-one｜note
衝撃的な作品『赤い繭』との出会い。 自分探しをしたのは、小学4年のころまででした。図書館で哲学・思想関連の本を借りまくっては、閉館時間まで読...
note.mu

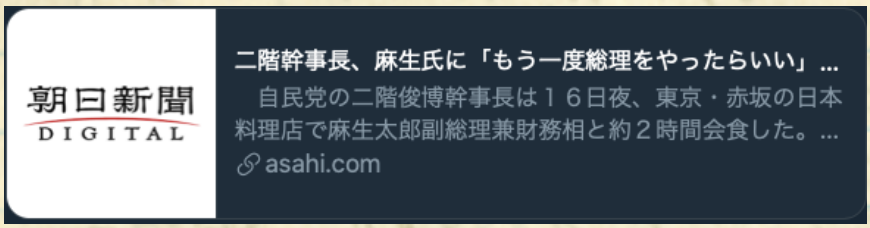
今月の読書会

佐賀大学で読書会@LCSU2013·Nov 1

〈佐賀大学で読書会〉
次回は11月24日日曜日、15時00分から17時00分まで、課題本は安部公房著「赤い繭」です。参加申し込みは11月22日まで。皆様のご参加をお待ちしています。



今月のユープケッチャ
早川タダノリ@hayakawa2600·Oct 17
安部公房の『方舟さくら丸』に出てくる「ユープケッチャ」という自分の糞を食べながら生きる虫を想起した：



今月の椎名麟三
愛書家日誌@aishokyo·Oct 1
1911年の今日は日本の小説家、椎名麟三が生まれた日です。苦労人。安部公房によると酒を飲むと泣くらしいです。



もぐら通信（第１０８号）第三版を発行しました。ダウンロードは：
https://docdro.id/sA0GIlW
訂正箇所は下記の通り：
１。Ｐ３：表紙
訂正前：顕微鏡といふが如し
訂正後：帽子に徽章といふが如し
２　全ての註釈に番号が欠けてゐたので付番をした。
３　Ｐ４５
訂正前：縄文期限論
訂正後：縄文紀元論
４　Ｐ４７：3.2.4 ネット・メディアとプロパガンダ
訂正前：として時代を超えて生きてゐる。
訂正後：削除
５　Ｐ４８：このページの最後の一行
訂正前：同じ趣味を持つ個人同士てつくる集団と 云ふことになります。
訂正後：同じ趣味を持つ個人同士でつくる集団と 云ふことになります。
６　Ｐ５０：最初の一行目
訂正前：ジャーナリスト同じ次の能力を個人が必要とする
訂正後：ジャーナリストと同じ次の能力を個人が必要とする

『周辺飛行』論
（２２）
３。『周辺飛行』について（１６）
『前回の最後にかかげておいた応用問題――周辺飛行１９』

岩田英哉

これが、役者に対する安部公房によるニュートラルといふ用語を使用してニュートラルといふ演技概念を解説した一連の解説の最後の解説です。周辺飛行１７、１８と来て、１９が三番目の周辺飛行論です。

この三回を振り返ると、「周辺飛行１７」の題が「ニュートラルなもの」、「周辺飛行１８」が「再び肉体表現における、ニュートラルなものの持つ意味について。」、「周辺飛行１９」は今回の「前回の最後にかかげておいた応用問題」となつてゐます。それでは、この周辺飛行論は何を論じてゐるかと云へば、冒頭に置かれた前回の「最後にかかげておいた応用問題」に対する「解答」を安部公房が自ら読者に対して、といふことは安部公房スタジオの役者たちに対してといふことでもありますが、提示をしてゐます。

そして、この解答は、

役者の身体の生理的感覚と感情と意識の集中の関係を極大と極少の概念を用ひて、その間を諧調と考へた場合に、役者の覚えるニュートラルといふ概念……【A】

に関する実に簡潔な、この周辺飛行１９も含めて全３回のまとめの的確な（それはこの概念の提唱者であれば当然と云へば当然のことですが）解答になつてゐます。前回の応用問題としての例題と、今回の解答を併記します。

この概念【A】の急所は、

概念【A】の其の正反対の演技論である、安部公房の言葉でいふ「型芝居」と呼ぶ、役者が心理的な方にはまつた音声と身体の表現を更に真似をするといふ其の新劇式の「型芝居」の全面的な否定をする概念……【B】

との裏表の関係にあるといふことです。

そして、大切なことは、これが、このまま安部公房スタジオの演劇活動、といふよりは総合舞台藝術活動の対社会的、世俗的な流行に対する非常に鋭い批評と批判になつてゐるといふことです。従ひ、安部公房の此のニュートラルといふ演技概念は２１世紀の今も十分過ぎる位に通用すると私は考へてゐます。「贋月報２０」（全集第２０巻の附録）より、

石沢秀二（演劇評論家・演出家）の言葉を引用します。少し長い引用になりますが、安部公房の文学にとつてのニュートラルといふ概念のジャンル横断的な、一般的な、そして普遍的な意義を言語と言葉と云ふ観点から指摘してゐて優れた発言だと思ふからです。

「　安部公房スタジオの最後のあの「仔象は死んだ」ね、［俳優座から移つて］スタジオに行った連中は、それなりに演劇的に大きな仕事をしたと思いますよ。安部先生はシンセサイザー使ってご自分で音楽おつくりになったじゃないですか。そして安部先生にとって、言葉ってのはなんだったんだろうってことをつくづく思いますね。歌舞伎や何かは一種ヒステリカルなものだっておっしやり方するじゃないですか。それで抽象度の高い音声とか、それから属性を排除して抽象された演技、動きの核というようなものを求められていった。そういう演劇で求められたものと、小説の、テーマとか何とかではなくて、その表現の核となるその言葉というものとは、もしかすると、安部先生の中では同んなじだったのかしら、ということを思ったりもするんです。
　そう僕が感じたのは、「緑色のストッキング」の田中邦衛さんの演技なんです。安部さんの文体自体というのはすごく抽象的なもんじゃないですか。そういう何か情緒的でも観念的でもない言葉自体が音声として出てくるという感じを持ったんです。それと井川比佐志さんの「時の崖」のボクシングして、体をいじめながら言葉自体が自立するみたいな感じね。

　最近思うのは、安部先生の基本としたニュートラルというような考え方なんてのは、もっともっと広がっていいんじゃないかってことなんです。「友達」とか「榎本武揚」やってる時は、まだテーマというか、共同体と個人の問題とかいうところで掴まえられたじゃないですか。けれども安部先生が安部スタジオでご自分で演出して作っていかれるようになると、安部先生の中には、何て言うのかな、ドラマの表現自体の核の追及ということが、あったんだなということを逆に知ったというか。それはプロパガンダなんかじゃない、その詩人としての資質が、イメージの豊さというのかな。たとえば、「友達」はヨーロッパやなんかでよく演られるけれども、日本ではアメリカ占領軍という形でも置き換えてできるわけだし、ある流行にのった村八分をするような共同体と個人とかね、いろんな照射の当て方ができる。そういう意味での普遍性のある抽象度の高さが、やはり大事なものだとね。そして遂に「仔象は死んだ」で、安部さんはいわゆるお芝居の台本というようなものは、使わなくてもよくなったんじゃないでしょうか。」

以上のことを踏まえた上で、前回の応用問題と今回の解答は次のやうになつてゐることをご覧下さい。

前回の応用問題：
「心理的に、怒り、あるいは恐怖として感じられるものの、生理的対応点をさがせ。極端な生理反応においても、ニュートラルの原則はそのまま適用される。ある生理的集中の方

向をつかみ、それを多少変形させることによって、怒りと恐怖の、かなりの部分が（心理を介さずに）表現できるはずである。」

今回の解答：
「　体の適当な場所に、痛みの感覚を設定すれば良い。足首の捻挫、虫歯の痛み、等々。それらの感覚を想起し、集中しながら、極限に近付けてみよう。その状態で、体表面を拡大させ、突出させれば、怒りになる。逆に、縮小させ、自分を内側にくぼませれば、恐怖になる。」

こ今回の解答の後に、この問ひと答へに関する意図についての、安部公房による要約が続きます。

「要するに、ニュートラルの概念は、俳優が心理や感情を、あくまでも肉体表現として捉えるための方法であり、生理的対応点の発見は、そのための技術なのである。」

そして、意識の集中による「生理的対応点の発見」とは何か、この技術の目的は何かといふことを、存在と言葉との関係で安部公房は次のやうに述べてゐる。

「しかし、肉体表現（狭義の）だけが、演技のすべてではない。俳優は、生理的集中によって存在している者であると同時に、言葉によって存在している者でもあるのだ。」

そして、続けて曰く「肉体の問題はいったん措いて、しばらく言葉について考えてみることにしたい。その上で、肉体と言葉の統一体としての俳優術（あるいは舞台創作術）に入っていくことにしたい。」と続けてゐて、この後の文章は「言葉によって存在している」とは何か、それはどのやうなことであるかを、三島由紀夫との対話を想起しながら、安部公房は語るのです。以上の要約は全集の一ページ分の量ですが、この後の三島由紀夫論といつても良い文章は此のエッセイの残り全部の二ページ強を占めてゐるのです。これは、如何に安部公房が三島由紀夫と存在と言葉に関する対話を大切にしたか、そして作劇術と演技論に関する立場は正反対であるにも拘らずお互ひによく理解しあふことができたかを示してゐます。

三島由紀夫に関する思ひは、そのまま安部公房自身の思ひであると理解して一向に差し支へなく、安部公房は三島由紀夫を語りながら、自分自身のことを語つてゐるのです。これは、誠に珍しいことだと私は思ふ。同じ種類の親しい友人の名前を全集の中から拾い出して挙げれば、十代の中埜肇、中田耕治、大坪都築がゐます。中埜肇は哲学の友、中田耕治は演劇と詩の友、大坪都築は詩の友であつたことが全集収録の書簡のやり取りや、最後の大坪都築のための弔辞によつて判ります［註１］。三島由紀夫は演劇と詩と哲学と小説を安部公房と共に共有し本質的な議論のできた相手でありました。三島由紀夫死後の安部公房はそれだけ一層孤独になつたでありませう。その欠落を、三島由紀夫の死後には、山口

果林がニュートラルな存在として現実と虚構共にあつて埋めたのだと、私は考へてゐます。山口果林著『安部公房とわたし』の帯文にある、この女優の聞いた安部公房の言葉「君は、僕の足もとを照らしてくれる光なんだ――」と云ふ言葉は、その文字通りの事実であつたと私は考へてゐます。

［註１］
中埜肇と中田耕治との書簡は全集中に検索できます。また大坪都築のための弔辞は、「弔辞―大坪都築追悼」として全集第１７巻（２８７ページ）に収められてゐます。

大坪都築について補足説明をしておきたい。『リルケの『形象詩集』を読む（連載第７回）：『飾り彫りのある柱の歌』、『Das Lied der Bildsäule』～リルケ・戯曲『石の語る日』・大坪都築・ラジオドラマ『棒になった男』・小説『S・カルマ氏の　犯罪』～」（もぐら通信第３８号）より引用します。以下の引用には安部公房の存在の中での師石川淳のための弔辞の解説も含まれてゐますが、これも安部公房の存在と言葉の関係を理解するために重要ですので、そのまま少し長い引用を含めて全体を引用します。

「安部公房全集をみますと、安部公房は生涯に二つの弔辞を読んでおります。

一つは、勿論存在の中での師として仰ぎ、存在の中で師弟の礼をとった石川淳のための弔辞［註２］、もうひとつは、大坪都築というラジオ・ドラマの世界で一緒に仕事をした友人のための弔辞です。

後者は、次のようなものです（全集第１７巻、２８７ページ）。傍線筆者。

「弔辞－－－大坪都築追悼

君の死は、私にとっても、単に身近な友人の死という以上の大きな出来事でした。私もまた君によって、ラジオの世界の本当の面白さを教えられた一人だったからです。君に演出してもらった「棒になった男」いらいラジオは私の仕事のなかの、かけがえのない重要な部分になりました。それにつけても、悔やまれてならないのは、あれ以来、君と一緒に、ほとんど仕事らしい仕事をしていないことです。たぶん、私たちが、互いに尊重し合いすぎていたせいかもしれません。それほど、君の死もまた、耐えがたく重いものでした。いま、君と最後の別れを告げるにあたって、私は、大きな支柱が一本折れてしまったような不安と虚ろさをおぼえずにはいられません。
しかし、これだけは約束できるように思うのです。君の残した仕事は、ながくラジオの世界に生きつづけることでしょう。生きることは死ぬことよりも難しいといわれますが、とりわけ困難なこの時代を、君は見事に生きたのです。生死の貸借表のうえでは、君はいまなお、生きつづけているというしかありません。私たちは、まだここ当分君のことを、生きている者のように語りつづけることでしょう。
昭和三十八年八月五日」

わたしは、この弔辞の「しかし、これだけは約束できるように思うのです。」という転調の言葉の調子に、十代の安部公房が、成城高校時代の哲学談義を交わした親しき友、中埜肇に宛てた手紙の調子を感じます。

この友人は、間違いなく、『棒になった男』のラジオドラマ化をするに当たって、安部公房に何か、十代の表立って詩人の時代のことに触れていた友人であったのでしょう。

この友人への弔辞には、石川淳の弔辞のような、存在に関係する安部公房の典型的な語彙と形象の言葉は現れてはおりませんが、この友人はもし仮に（仮にです）言えるとしたら、それは、存在の中の友人（安部公房の論理ではこのような友人は遠く遥かに離れている以外にはあり得ませんが、そうだとしても）といいえ

るかも知れないという程の、身近にいた、大切な友人であったのでありましょう。

そうして、この１９５０年代の後半の時期に、ラジオ・ドラマは、それほどに安部公房にとっては大切な領域の仕事であった。

この弔辞を読んで判ることは、次のようなことです。

１。この友人がそのような友人であったということ。
２。ラジオドラマ『棒になった男』は、安部公房にとって、詩の世界を思わせるような科白の劇の世界であったということ。
３。やはりここでも、安部公房は人間の生死を「貸借対照表」と言っているように、正と負で数学的に、しかし譬喩（ひゆ）として、従い詩的に、考えていること。この友人との関係を、詩の世界との関係で考えていること。［註３］

［註２］
『奉天の窓の暗号を解読する（後篇）』（もぐら通信第３３号）より、該当部分を引用します。

「［註４１］
これらのことを考えて参りますと、安部公房の師、石川淳の葬儀の場で安部公房の読んだ弔辞の、次の言葉が思い出されます。この弔辞に使われている語彙は、この論考をここまで書いて参りますと、実に安部公房好みの語彙が選択されており、その世界に石川淳を、いつもの陰画の呪文を唱えて結界を張り、蘇生させて、呼び出したいという安部公房の強い思いが伝わって参ります。

そうして、ここで石川淳との関係を深海の中での関係として述べていることは、そのまま『無名詩集』の（既にこの論考で読んだ）『心』や、同じ詩集の『防波堤』や『孤独より』の「其の七」という詩や、『水中都市』や『第四間氷期』や、安部公房スタジオの『イメージの展覧会』の布（存在）や『水中都市（GUIDEBOOK III）』の布（存在）や『人命救助法』の水（存在）の形象（イメージ）や『S・カルマ氏の犯罪（GUIDEBOOK IV）』の砂漠（存在）、即ち裏返しの海（存在）の形象や『仔象は死んだ（イメージの展覧会）』の布（存在）で安部公房が表現した存在の中での師弟関係であったといっているのです。

これは、すべてリルケに学んだ存在という概念なのです。何故ならば、海の水は、どんなに物に衝突して離れても、また向こう側で必ず一つになるもの、即ち存在であるからです。（［註１２］の提灯や入籠構造を備えた器であなたに示した言語の形象を思い出して下さい。）リルケが同じ性質を有するものとして褒め称え、荘厳した存在に、風があり、人間の風である息があり（息が機縁となって人間の内部と外部が交換されるから）、動物としては、空を飛ぶ鳥と其の鳥の群れがあります。これらに共通していることは、分かれ別れても一つになるということなのです。それから、植物、循環して生き、垂直に成長して無時間の空間を生きる植物である木や花が、風と同様に、リルケの純粋空間に生きる生き物なのです。自然がそうであり、動物や植物がそうであれば、一体人間はどうなのでしょうか。存在としての人間が、即ち繰り返し循環しながら無時間の純粋空間に果てしなく垂直に成長して行く存在である人間がいるのではないでしょうか。それが、すべての安部公房の主人公たちなのです。リルケが『オルフェウスへのソネット』で歌った神的な青年、即ち自己を喪失して刻一刻果てしなく変身を続けて存在の中に隠れ続けて、誰にも知られることのないオルフェウスのような（垂直方向に樹木のようにいつまでも成長し続ける）存在が、即ち差異（時間の無い純粋空間）に棲む人間たちが、すべての安部公房の主人公たちなのです。

こうしてみますと、安部公房がリルケに学んだ存在の概念は誠に深く深く、安部公房のこころに生きております。

さて、長くなりましたが、存在の中での師弟関係を読んだ、安部公房の弔辞です。傍線筆者。

「　いわゆる弔辞をのべるつもりはありません。弔辞というものは、ナメクジにかける塩のようなものです。危険なもの、不穏なものを消してしまうための呪文にすぎません。
　石川さんには危険で不穏な存在のままでいてほしい。石川さんが亡くなったという実感がまるで湧いてこない、この気分をそのままに維持しておきたいのです。文壇という村構造に異議申したてをつづけ、潜水作業中の孤独な作家に酸素を送る仕事を引き受けた石川さんになお休息は許されない。石川さんのポンプから送られてくる救命用酸素を待つ者はいまなお跡を絶たないのです。
　ぼくも石川さんの救命ポンプに救われ、はげまされた一人です。（略）

（略）あるべき表現を「精神の運動」と言いきった石川さんは、孤独な深海作業者のための命綱であっただけでははなく、自分自身もまた孤独な深海作業者だったのです。
　そして救命ポンプは現に作動中です。
　　一九八八年一月二二日
　　安部公房」」」

さて、三島由紀夫の話です。

二人の対話し、合意した演技論の核心は安部公房の次の言葉に尽きる。

「俳優が、言葉による存在でなければならないのは、戯曲以前の問題なのである。」（傍線は原文では傍点）

そして、安部公房が「〜以前」と云ふ言ひ方をする時には、常に存在が問題になると云ふこと、そしてそれが本質的にものを考へる安部公房の超越論であることは諸処既述の通りです。今『安部公房と共産主義』（もぐら通信第２９号）より引用してお伝へします。

「安部公房は、何か危機的な時、転機の時には、いつも言語とは何か、文学とは何かを問い、後者 の問いの次には、必ずといってよい程、その最初に戻って物を考え、前者との関係で詩とは何か、 小説とは何か、戯曲とは何かを問うて、そうして言語以前、詩以前の、即ち未分化の実存と言う 未だ名付けられない存在のことを考察してから、その問題の本質へと入って行きます。即ち、論 ずる対象「以前」に戻って考えるということを致します。更に即ち、時間を捨象して、物事の本 来の、根源的なあり方として物事を考える、そのそもそもを存在論的に考えるのです。 そうして 其の根源的な、論ずる対象のあり方を存在と呼び、存在として、即ちこの世に現れている「以前」 の無名のものとして考え、それを論じる対象との関係にある語彙を使って次に有名なものとして 考え、論じるのです。［註２２］

［註２２］
詩については、『第一の手紙～第四の手紙』で「詩以前」を論じています（全集第１巻、１９１ページ下段）。この 散文を書いた１９４７年、安部公房２３歳の時には、既に詩人安部公房にとっての危機と転機の時期が訪れていたの です。前年１９４６年には満洲から引き揚げて来て、日本に帰国した翌年のことです。このときの危機は、詩人とし ての危機でした。

この危機をこのように『第一の手紙～第四の手紙』で存在論的に思考して考え抜いて乗り越えて同じ歳に出版したということが『無名詩集』の持つ、安部公房の人生にとっての素晴らしい価値であり、安部公房の人生に持つ『無名詩集』の意義なのです。何故ならば、それまでの１０代の「一応是迄の自分に解答を与へ、今後の問題を定立し得た様に思つて居ります」（『中埜肇宛書簡第９信』。全集第１巻、２６８ページ）と１０代の哲学談義をした親しき友中埜肇に書いたこのことが、『無名詩集』の持つ意義なのです。『無名詩集』は、この観点から読まれるべきなのです。

小説については、この『猛獣の心に計算機の手を』で、「読者の存在」（全集第４巻、４９７ページ）と呼んでいま す。「小説の存在」とは言わなかったのは、小説は読者あっての小説だという考えであるからです。ここで「読者の 存在様式こそ、小説の表現（認識の構造）の様式を決定する」と書いておりますので、小説以前の存在を読者の存在 として論じていることがわかります。この読者とは何を意味するかについては、上記本文で、また［註２０］で論じ た通りです。このときの危機は、小説家としての危機でした。そうして、シナリオ（drama、劇）を執筆する戯曲家た る安部公房が、小説家たる安部公房のこころを救済したのです。

戯曲と舞台についても、安部公房は同じ思考の順序を踏んでいて、１９７０年代の安部公房スタジオの俳優たちには、 「戯曲以前」にまづ「言葉による存在」になること、俳優以前にまづ「言葉によって存在」することを要求していま す。［註２４］この言葉を読むと、安部公房が、この安部スタジオをどのような思いで立ち上げたのかが、よく判り ます。これも、詩や小説の場合と同様に、１０代の安部公房の詩の世界、即ち、時間の無い、自己が存在になること のできるリルケの純粋空間への回帰なのです。このときの危機は、戯曲家としての危機でした。

その淵源を求めて時間を遡れば、最初にこの何々以前という考え方が文字になっているのは、やはり２０歳のときに 書いた『詩と詩人（意識と無意識）』です。この詩論・詩人論では、「価値以前」と存在が呼ばれて、この存在を更 に夜と言い換えて論じられております（全集第１巻、１１２ページ上段）。この『詩と詩人（意識と無意識）』は、 『中埜肇宛書簡第１信』によれば、遅くとも此の書簡を書いた１９４３年１０月１４日、安部公房１９歳の秋には、 「新價値論とも云ふ可きものの体系」として考えられております（全集第１巻、６８ページ下段）。」

三島由紀夫論を続けます。しかし、これは同時に安部公房による安部公房自身についての言葉でもあるのです。次の四行に於いて、安部公房と三島由紀夫は分かち難く、二つのものではない。

「　たしかに三島君には、絶望するだけの根拠も資格もあった。彼は言葉のなかに生きていた。あるいは、言葉を生きていた。彼自身、作品の前にすでに言葉によって存在する作家だったから、俳優に対しても同じ水準を要求できたのだ。」（傍線は原文傍点）

次の言葉も安部公房が三島由紀夫と一致した考へであつた筈です。

「だが、俳優も作家同様、言葉なしには存在しえないものなのだ。べつに俳優に作家になれと言っているのではない。作品以前の場所で、作家と対等の対話の精神を身につけてほしと願っているだけである。買いかぶりだと言われるかもしれないが、なぜ俳優が作者と対等であってはいけないのか、ぼくにはさっぱり分からない。」

「作品以前」と云ふところに、安部公房が安部公房スタジオの俳優たちに求めた存在概念が隠れてゐるでせう。ニュートラルとは「〜以前」であることなのです。

そして、このやうな友であれば、対等に対話をすることができる。その最高の友が三島由紀夫であつた。安部公房は続けます。しかし依然として、私には安部公房が三島由紀夫の追憶をしながら同時に、自分自身について語つてゐるやうに聞こえるのです。

「　それにしても三島君は、まさに対話の名手だった。もちろん対話は相手を選ぶ。すくなくともぼくにとっては、得がたい対話の相手だった。真の対話には、論破することも、されることもない。論争とは違うのだから、勝敗は問題にならないのだ。また、社交でもないから、譲歩しあう必要もない。なんの妥協もなしに対立し合い、しかも言葉のゲームをたっぷり堪能するという、いわば対話の極地を体験できたのも、三島君との出会いのおかげだったと思う。だからぼくの記憶の中では、ファナティックな三島像というものは、どうしても結像させにくい。（略）だいたい一方的な自己主張だけで、対話が成り立ったりするわけがない。相手の言葉を通路にして、その瞬間ごとにすばやく相手になり切ってしまう能力と努力が、対話を成立させるための最大の条件なのである。地動説の地球の芯に居倨ったような姿勢では、対話を望む気持も起こらないだろう。三島君にはつねに他者に対する深い認識と洞察があった。絶望はいわばその避けがたい帰結だったのだ。」

引用の順序は相前後しますが、「もちろんこれは至難の業だ。作家仲間でも、真に対話が可能なのは、僕が出会ったかぎり、三島君と大江健三郎君くらいのものだった。」とは、率直な感想です。

安部公房は上記の引用の、三島由紀夫には「つねに他者に対する深い認識と洞察があった。絶望はいわばその避けがたい帰結だったのだ。」といつた後に続けて、次の段落でユーモアと対話について次のやうに述べてゐます。これも安部公房文学の核心です。何故なら、私たち読者は、この安部公房のユーモアと笑ひに惹かれて作品を読むからです。

「　いま一つ、真の対話の欠かせない要素として、ユーモアの感覚がある。もちろん三島君の死にユーモアはない。ある瞬間、彼はユーモアと一緒に、対話の希望も捨て去ったのだろう。そういう瞬間は、ぼくにだって一日に何度でもやって来る。ただ、彼の瞬間は、

ついにそのまま翌朝を迎えることがなかった。だからと言って、彼がユーモアを深く理解した人間であったことと、少しも矛盾はしないのだ。あの死に方から、ゆとりのない筋張った人間像を思い浮かべている人のために、これだけは弁明しておきたい。彼の精神はつねに鋭く緊張していたが、けっして硬直はしていなかった。対話とは、一種の弁証法であり、ユーモアはそれを持続させるための潤滑油なのである。」

このユーモアを解する対話の精神の持ち主である三島由紀夫が、安部公房の超越論に関する言葉、例へば「〜以前」を十全に理解してゐた事、また従ひ、ニュートラルと云ふ概念も同じく十全に理解してゐた事は、安部公房の、このエッセイの最後の次の言葉で判ります。

「　しかし……と、たぶん反論が出るに違いない。それほど、言葉による存在そのものだったはずの三島君が——それもあれほど俳優にあこがれていた三島君が——なぜ有能な演技者たり得なかったのか？理由は簡単だ。彼は、俳優にとって不可欠なもう一つの条件である、肉体表現のニュートラルを性格的に理解できなかったのだ。理解はできても、ぼくと同様、実行不可能だったのかもしれない。しかし、もし彼がわずかに自制心を働かせて、ぼくのように演出を目指していたら、おそらくぼくに劣らぬ演出の先駆的改革者になっていたのではあるまいか。（「笑」と対談ならば入るところ）」（傍線は原文は傍点）

三島由紀夫の最後の戯曲『癩王のテラス』では、最後に肉体と精神の対話がなされ、前者が後者に打ち勝つと云ふ筋書きになつてゐます。そして、最後に（「笑」と対談ならば入るところ）」と付記したのは、多分安部公房は三島由紀夫との対談『二十世紀の文学』（１９６６年）を思ひ出してゐたに違ひない。この対談で、三島由紀夫は自分の文学の主題４つを、安部公房と対話を重ねながら、果たしてどのやうに此れを安部公房は理解するか、果たして理解されるか、されるとして一体自分自身の此の４つの主題は如何なるものであるのかを自分の分身たる安部公房の言葉として傾聴したいとおもつて対話をしてゐたからです。それほど此の対談は、三島由紀夫の人生にとつて真剣な大切なものだつた。

その４つの主題とは、三島由紀夫が自決する一週間前に東武百貨店で開催された「三島由紀夫展」で、自分の文学的人生を書物の河、舞台の河、肉體の河、行動の河という四つの河で表したものでした。それぞれ、言葉、戯曲、肉体、行動と云ふ主題であり、これがそのまま『豊饒の海』４巻の主題でもある事は、「安部公房の読者にしか書けない『美しい星』論」（もぐら通信第１０１号および第１０２号）にて論証した通りです。

「次回から、言葉についての、より実際的な考察を進めてみることにしたい」と最後に一行書いた安部公房は、次回の周辺飛行では、従ひ、肉体から科白へと主題を移すことになります。三島由紀夫ならば、肉体から詩の精神へ、即ち純粋なる肉体即ち存在といつたことでありませう。何故なら『太陽と鉄』と云ふ最晩年のエッセイを読みますと、安部公房の如上の存在概念は、三島由紀夫にあつては純粋なる肉体を意味してゐたからです。

ところが、この「次回から、言葉についての、より実際的な考察を進め」るといひながら、主題が写真と覗きであると云ふところが、安部公房の安部公房たる由縁なのです。これが、安部公房の言ふところの言葉である。

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（５２）
第２部 XXVII
～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XXVII

GIEBT es wirklich die Zeit, die zerstörende?
Wann, auf dem ruhenden Berg, zerbricht sie die Burg?
Dieses Herz, das unendlich den Göttern gehörende,
wann vergewaltigts der Demiurg?

Sind wir wirklich so ängstlich Zerbrechliche,
wie das Schicksal uns wahr machen will?
Ist die Kindheit, die tiefe, versprechliche,
in den Wurzeln — später — still?

Ach, das Gespenst des Vergänglichen,
durch den arglos Empfänglichen
geht es, als war es ein Rauch.

Als die, die wir sind, als die Treibenden,
gelten wir doch bei bleibenden
Kräften als göttlicher Brauch.

【散文訳】

本当に、時間は存在するのだろうか、この破壊するものは。
いつ、静かに憩う山の上で、時間は城を破壊するのだろうか？
このこころ、果てしなく神々に帰属しているものを
いつ、デミウルクは、暴力を以って我が物とするのだろうか？

わたしたちは、本当に、かくも心配で不安でいる壊れやすいものたちなのだろうか？
運命がわたしたちを、そうだ、それが本当だ、真実だとしたいように。
子供時代は、この深い、約束された、約束することの豊かな、
根っこの中にある子供時代は―後になってその威力を発揮するのではないか？―静かに、静かなままで、そうではないのか？

ああ、過ぎ行くものの亡霊が、
悪意無く、無邪気に受け容れる者を通じて、
恰も煙の如くに行く。

わたしたちは、急ぎ、駆り行くものたちであるわたしたちは、
留まる諸力のもとで、神々しい、神の慣例、風習、必要として通用しているのだ。

【解釈と鑑賞】

このソネットの主題は、時間です。そうして、時間と人間であり、そのふたつの間の関係です。

最初の一行の問いは、いい。これが、ずっと、このソネット全篇を通じて、リルケが発したかった問いである。この問いを発するために、これまで５６のソネットを書いてきたのだ。

時間は本当に存在するのだろうか？この破壊する時間という奴は。
ドイツに行きますと、山々の上に城がある。Burg、ブルクと呼ばれる城があります。そのような、高いところにある、余人の行かぬ城をも、時間は破壊するのだろう、そうしてそれはいつなのだ。そのとき、その瞬間はいつなのだと話者は問うています。そんなことがあるのだろうか。

城を問うたのは、やはり、今までのソネットの中に、中世的なものが歌われていたからだと思います。特に印象深いのは、第1部ソネットXIに歌われるふたりの騎士たちです。それから、第2部XIの騎士の、死の罠を仕掛けて動物を殺すことをも正当化する者と激しく戦う、騎士の従者。それ以外に、言葉の上で、直接その者の名前を呼ばず、異名で呼ぶ、リルケの心性。このことに関係していますが、概念を生きたもののごとくに、擬人法ではなく、それそのものとして感じ、呼び、歌う、リルケの心性。第2部ソネットXXIVの第4連で、Tod、トート、死を、死ではなく、死神と訳したくなるような、そうしてわたしはそう訳しましたが、そのような感性と感覚。同じものは、第1部ソネットVIIIの妖精の名前が、Klage、クラーゲ、嘆きというところにも明瞭に現れておりました。嘆きという名前は擬人法による名前ではない。これは、このまま、悲歌の感性と心性でもあります。リルケからみれば、擬人法は堕落です。と、そういいたい。そのように思われます。それから、泉というモチーフ、主題、素材。

さて、しかし、そのような中世的な、時間を越えて存在する世界を破壊するかと問うに足るような時間であっても、それは本当に存在するのだろうか。仮りにそうだとしよ

う、そうだとして、破壊されないものがあるのだ、それが、こころだとリルケは歌っている。

それは、神々に帰属しているものだからだ。第2部ソネットXXIV第3連では、神々は、不死のものたちと呼ばれています。それゆえ、プラトンが世界の創造者と考えて、そう呼んだデミウルゴスも、暴力を以ってしては我が物とすることも、破壊することもできないのだ。そのような瞬間があるとは思われない。それが、こころだといっている。

これが第1連です。第2連では、

運命がそう信じ込ませようとしているように、わたしたちは壊れやすい存在なのだろうかと問うて始まります。しかし、そうではない、わたしたちには、子供時代という時期がある。それは、深く、約束されることの多い、樹木の根の、この生の根、純粋な生の根の中に眠る、死に脈絡する純粋な空間の時代があって、それが大きくなったら、威力を発揮する、それも騒がしくなく、静かに。

第3連。

「ああ、過ぎ行くものの亡霊が、
悪意無く、無邪気に受け容れる者を通じて、
恰も煙の如くに行く。」

この「悪意無く、無邪気に受け容れる者」とは、オルフェウスです。「過ぎ行くものの亡霊」とは時間です。時間は、「恰も煙の如くに行く」。

この第3連で、リルケが時間をどのように考えて来たかは、明瞭だと思います。

しかし、わたしたち人間は、「急ぎ、駆り行くものたちである。」しかし、そうではあるが、そのようなものとして、流れる川として（第1部ソネットVIIIの第1連。第2部ソネットの第4連）、神々に仕えるものとして、不易の、留まる諸力のもとに、意義あるもの、意味あるもの、価値あるものとして通用しているのだ。

こうして、この詩を読んでも、第1連で、城というBurg、ブルクと、プラトンの考えた創造主、Demiurg、デミウルクが、脚韻を踏んでいるなどというのは、読んでいて楽しい。どのソネットでも脚韻を踏んでいることはひとことも、今まで言いませんでしたが、これはソネット全篇を読んでいて、詩を読む楽しさ、よろこびを覚える、何か詩というものの本質に通じる感動なのだと思います。韻律こそは、詩の命なのだといいたくなります。韻律と意味の斉合性によって生まれる世界です。

「留まる諸力」、不易の諸力とは、こうして第2部ソネットXXVIIまで来てみると、空間を成立させ、存在せしめている諸力なのだと思います。そうして、その空間の交換を成り立たしめている。第１部ソネットXIIの第3連では「諸力の音楽」として歌われた、それは純粋な距離を現出せしめる。第1部ソネットXVIの第2連では、われわれ人間が日々部分の仕事をなしても、それを全体にならしめる、死者の持つ諸力。第2部Xの第3連では、その前に跪（ひざまづ）き、驚くべき諸力。そのような力として歌われて来た力です。

そうして、そのような諸力に拠るわたしたちの普通の淡々とした生活は、立派なものだといっているのです。立派なものだというわたしのこの解釈は、余りに通俗に響くかも知れませんが。しかし、そこには、確かに不易があるのです。「悪意無く、無邪気に受け容れる者」の故に。その者は、日々、生活の中で、わたしたちひとりひとりでありたい。

【安部公房の読者のためのコメント】

この詩から連想するのは、『終りし道の標べに』の冒頭のエピグラフの詩です。

子供時代は空間であり、時間の勢力の影響を受けない大切な時代だと云ふリルケの言葉は、この詩以外にも、第VIIIの詩にありました。そして、詩文としては安部公房の『終りし道の標べに』の冒頭のエピグラフを引用します。

「最近改めて『終りし道の標べに』の最初の版（１９４８年：真善美社版）と二番めの版（１９６５年：冬樹社版）のエピグラフを比較をして、誠にお恥ずかしいことに遅ればせながら気づいたことがあります。安部公房の存在論の記号《　》に注意してお読み下さい［註１］。

１９４８年：真善美社版：
「亡き友金山時夫に

何故そうしつように故郷を拒んだのだ。
僕だけが帰って来たことさえ君は拒むだろうか。
そんなにも愛されることを拒み客死せねばならなかった君に、
記念碑を建てようとすることはそれ自身君を殺した理由につながるのかも知れぬが……。」

１９６５年：冬樹社版：

「《亡き友に》

記念碑を建てよう。
何度でも、繰り返し、
故郷の友を殺しつづけるために……。」

［註１］
安部公房の存在論の記号に関する簡略な結論の説明は『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第６６号）の「３。『カンガルー・ノート』の記号論」を、また詳細の論述については『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号から第５９号）をお読みください。論証しました。

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について（３）』（もぐら通信第５８号）の「IV 「転身」といふ語のある小説を読む（「②詩と散文統合の為の問題下降」期の小説）」中の「１。「②詩と散文統合の為の問題下降」の時期：（２）詩と散文の統合：詩形式による「今後の問題の定立」（『無名詩集』）：１９４６年～１９４９年：２２歳～２５歳」より引用して概要を説明します：

「【散文に関する結論】
『終りし道の標べに』では、

（１）安部公房独自の話法、即ち内省的な記憶の中での「僕の中の「僕」」に呼びかける話法にあつては、会話は《　》でやりとりされてゐる。それから、
（２）此の意識に連なる場合の哲学用語についても、《　》で書かれてゐる。これに対して、
（３）呼びかけない話法、即ち形式上普通の話法にあつては地の文の中で「　」で語られてゐる。
（４）『終りし道の標べに』は、このやうな二層の構成をとつてゐる。そして、

『名もなき夜のために』では、

（１）《　》の使ひわけはそのまま〈　〉といふ記号として『名もなき夜のために』に受け継がれてゐる。しかし、この使ひわけはもつとよく整理されてゐて、
（２）安部公房独自の話法の内にある詩の世界の言葉だけが〈　〉といふ記号で識別されてゐる。一言でいへば、リルケの世界に関する用語だけが〈　〉の中にある。勿論哲学用語と重なる同じ言葉はあるが、それは哲学用語ではなく、リルケと自分の詩の世界の言葉である。
哲学用語が〈　〉の中にあることはない。即ち哲学用語は地の文の中に問題下降されてゐて、普通の言葉になつてゐる。
（３）『終りし道の標べに』を問題下降して『魔法のチョーク』を書くために、『無名詩集』をも併せて問題下降した数学的中間項である詩的・散文的作品『名もなき夜のために』は、『終りし道の標べに』を踏襲して、このやうな二層の構成をとつてゐる。
（４）『名もなき夜のために』では、後述する安部公房の問題下降の努力によつて、安部公房らしいことに、《　》や〈　〉の記号の階層にある文と地の文に書かれた文字そのもの、文章（text）そのものの topologicalな交換、即ち『デンドロカカリヤA』（雑誌「表現」版）の主人公コモン君の経験した座標の喪失、即ち内部と外部の交換を、安部公房は『名もなき夜のために』で、自分自身の事として、そして文章（texts）の問題として実行した。これは、全くバロック的な試みであるといふ事ができる。

このやうに意図して、また同時にtopological（位相幾何学的）な方法で、安部公房は詩人から小説家になつたのである。この論理的な、問題下降による変身または「転身」は、誠に安部公房らしい。」

問題下降完成前の１９４８年の作品では、まだ金山時夫といふ固有名詞であり、リルケの『オルフェウスへのソネット』を共有した最も親しい詩の世界の友人であつたものが、問題下降完成後には存在論の記号の中に入れられてゐて《亡き友に》とあつて、この友が存在に生きる普遍的な友であることを文字と記号で書き表すことができてゐます。

リルケの『オルフェウスへのソネット』の第一部Vの詩は次のやうに記念碑で始まります（もぐら通信第６０号）：

「記念碑を建てることをしてはならない。薔薇には、
彼のために、ただただ毎年花を咲かせるようにしなさい。
何故なら、オルフェウスが薔薇だからだ。オルフェウスは変身して、
これにも、あれにも、なっている。わたしたちは、オルフェウスという

以外の名前を思い煩うには及ばない。歌声があれば、いつも、（以下略）」

ですから、冬樹社版の「記念碑を建てよう。」といふ最初の一行の言葉は、この友人の霊を弔ふために存在の記念碑を建てようといふ意味であるものの、その霊を慰める慰め方は、日本人の世間の例とは全く異質であつて哲学的なのであり汎神論的存在論に基づく存在の慰霊祭なのであり、それ故に「何度でも、繰り返し、/故郷の友を殺しつづけるために……。」とあるやうに此の故郷が皆、その後の安部公房の主人公となつて最後に失踪し、または理由の如何はともあれ、死ぬことができる存在の故郷なのです。

この安部公房の、現世にあつて普通の人には残酷で異常な論理は、三島由紀夫の創作論理、即ち、親しく敬愛した知友を虚構の中で殺人するといふ此の作家の礼儀作法［註２］に通じてゐます。勿論、方向は正反対を向いてゐて［註３］、現に生きてゐる友を虚構の中で殺す三島由紀夫に対して、安部公房は、死んだ最も親しい友を虚構の中に《存在》として生かすからです。しかし、後者については、やはり三島由紀夫の礼儀作法の場合同様、現世にあつて普通の人には残酷で異常な論理と言はれるでせう。

この二人の共有する接点と、ここでも正反対の方向を持つてゐる二人の言語藝術家が日本の明治時代以降の日本の文学史上有する意義については、考察に値すると私は思つてゐます。如何に二人の藝術上の関係と其のあり方が、特に先の戦争後の日本の国と日本人に対する徹底的且つ苛烈なる批判そのものであるかは、二人の藝術観の対照も含めて、言語の観点から、稿を改めて論じます。

［註２］
「『月澹荘奇譚』論」（もぐら通信第８７号）に詳述しましたので、ご覧ください。

［註３］
安部公房の言によれば、二人はあらゆる接点を共有していながら互いにすべての接点で正反対の方向、或いは接点そのものの陰陽が裏返っている（「彼との接点は、全部うらがえしになっている。」：「『対談』［対談者］大江健三郎・安部公房」全集第２９巻、７３ページ下段）。」

子供時代は空間であれば、それは人生の花さく地上にではなく、地下の根つこの世界であり、リルケの此の詩集で歌ふ死者たちの棲む世界に重なります。これがリルケとの関係で云ふ「墓と手を結んだ生誕」でありませう。さう理解すれば、『終りし道の標べに』のエピグラフを受けての第一段落が次のやうに書かれてゐることを、私たちは容易に理解することができます。

「　旅はおわった所から始めねばならぬ。墓と手を結んだ生誕の事を書かねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか？……ああ、名を呼べぬ者達よ、此の放浪をお前に捧げよう。」
（『終りし道の標べに』全集第１巻、２７３ページ）

「何故に人間はかく在らねばならぬのか？」と云ふ問ひに対する答へを、安部公房は現存在と呼びました。現存在とは、時間の中に上記の詩の通りに生きる、しかし存在と云ふ時間のない空間に生きる（この地上では死者ではない、あるひは恰も死者のやうに生きる）人間のことです。

エピグラフに、

１９４８年：真善美社版：
「亡き友金山時夫に

何故そうしつように故郷を拒んだのだ。
僕だけが帰って来たことさえ君は拒むだろうか。
そんなにも愛されることを拒み客死せねばならなかった君に、
記念碑を建てようとすることはそれ自身君を殺した理由につながるのかも知れぬが……。」

とある事を読めば、安部公房は金山時夫と、このリルケの詩想を深く共有してゐた事が判ります。それ故に金山時夫は日本と云ふ故郷のみならず、故郷自体への回帰を拒んで、

オルフェウスのやうに「転身」の人生に徹して生き抜いた、即ち、奇妙な言ひ方ですが、時間の中を死に抜いた。それ故に、「記念碑を建てようとすることはそれ自身君を殺した理由につな/がるのかも知れぬが……。」と云ふ安部公房の最後の一行があるのです。

「転身」と云ふリルケの此の詩の主題である動機（モチーフ）が、安部公房にとつてどんなに自己の文学にとつて本質的で大切なものであるかは、初期安部公房論『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号から第５９号まで）をご覧下さい。詳述しました。

Mole Hole Letter（３０）

第三次世界大戦とは何か
～EXIT帝国対中華帝国の戦争～

岩田英哉

我が侘住まひにて諸事万般をつらつらと徒然草してゐて言語の観点から世相を観ると（もはや世相も国際世相の意味である）、私の国際情勢理解、即ち現下の敵味方陣営分布は次の通りです。この二つの対立する陣営に、二階層戦争論で示した物理層と論理層の（通信技術を加へて）二層化された世界像が重なる。このやうに物を見るといふことです。

１。結論

今は、そして今後も、第三次世界大戦（これは論理層での通信経営資源国家間争奪戦争）、第二次冷戦（これは物理層での経済戦争）、即ちいづれも政治戦争、文明間戦争、思想戦争が米中で起きてゐる以上、これは２１世紀の帝国主義による覇権戦争である。この２１世紀型の帝国主義戦争の敵味方陣営は、それまでの枢軸・連合国陣営ではなく、次のやうになる。

中華帝国 versus EXIT帝国（と今仮に呼んでおく）

EXIT帝国とは何かを説明します。

２。EXIT帝国

私がEXIT帝国と命名した帝国には次のものがあります。

（１）大英帝国：Brexit：E Uからの離脱。大陸ヨーロッパとEUといふ経済共産主義またはグローバリズムからの離脱。

（２）アメリカ帝国：Amexit：７０有余年の第二次大戦後の自ら築き、そしてNYのウオール街の国際金融資本主義即ちこれも経済共産主義またはグローバリズムである第二次世界大戦後の世界体制からの離脱。これをジャック・デリダ風に政治版のdeconstruction（解体構築）と呼んでも良い。今や、ある空間を出ること（EXIT）が、国際政治に於いてもdeconstructionといふことになつた。アメリカは連合国群の一員に留まることはもはやこれまで、自国の国益を損なふと判断したといふことです。

（３）日本帝国：Japanexit：アメリカ同様に軌を一つにして第二次大戦後に旧態依然に残つてゐる極東冷戦構造からの離脱である。しかしながら、国家意志の貧弱であることが国民にして見るとまことに嘆かわしいお笑ひ国会議事堂であり、霞ヶ関とは名前通りの霞で出来た屁の突つ張りにもならぬ立派な関所である。これは勿論、いふまでもなくJapanexitとは特亜三国からの離脱であり、また日米同盟を組んで米国と歩調を合はせる

以上、７０有余年の第二次大戦後の、戦勝国の異名であるUnited Nations（連合国群）による世界体制からの離脱である。

日本には天皇の御存在があり、これを諸外国にては我らには不本意ながらEmperorと訳してゐて（他に翻訳しようがないであらう）、この理由で英語の日本国の正式名称はImperial Japanであり、和訳は日本帝国である。これが本来日本の正式名称であるので、世界情勢がこのやうな次第なれば、今後この名称をどの諸国にも遠慮することなく使ふことができよう。

（４）インド帝国：Indexit。インドが何から離脱を図ってゐるものか、私はインドの情勢に暗いので不明であるが、間違ひのないことは、大英帝国に始まる近代欧米文明世界秩序からの離脱です。そして、日米帝国のアジア太平洋構想を積極的に受け容れてゐる以上、そしてムガール帝国を過去に持つインドである以上、インド帝国と呼ぶことはおかしいことではない。インド帝国もまたこれまでの世界体制からの離脱を図つてゐるのだと考へることができる。インドの敵は国境を接してゐる中華人民共和国である。

（５）ロシア帝国：Russexit。ロシアが離脱を図つてゐるのは、歴史的にもまた地政学的にもヨーロッパ地域からの離脱です。ロシアはヨーロッパではない。イギリスは島国として大陸ヨーロッパではないが、ロシアは大陸国家としてヨーロッパではない。冷戦時代に西ベルリンと東ベルリンに立つて遥か東を眺めるとルーマニア辺りまでは想像できせうに思つたが、其の先はせいぜいモスクワ辺りまでで、その向かふの広大至極のユーラシア大陸は茫漠たるもので、私の生活圏と想像圏の外であつた。

ヨーロッパを挟んで東西に、片やブリテン島、片やロシアの大地といふ振り分けに地理的に、従ひ政治の視点から地勢を地理として観れば地政学的に、さうなつてゐる。

３。この命名による仮説に関する説明

（１）これらは１９世紀来の帝国主義の帝国とは異なり、逆に１７世紀のバロック時代のウエストファリア条約をヨーロッパ地域諸国が締結した精神に戻って、一国自主独立を互ひに認めての国家主権の独立主張・平和希求帝国である。といふ、正反対の性格を有してゐる。
（２）これらの帝国は論理層を抱へてゐることもあるので、メタ帝国と呼んでも良いかも知れない。この名前の確定にはもう少し慎重な検討を要する。何故なら帝国主義といふならば、次の中華帝国もまた１９世紀型帝国主義覇権を求める共産主義国家であるからだ。この帝国の問題は共産主義国家であることに加へて、マルクスとマルクス主義の世紀にはなかつた論理層での国家経営資源である通信技術を手中にしてゐることと、これを以て覇権を全世界に及ぼして中国共産党一党独裁の、虚構の小説の「１９８４」の世界を「２０８４」として現実につくらうとしてゐること、即ち２１世紀の絶対悪であるといふことです。即ち、今の５G世代の通信技術の次の世代次の階層の６Gの技術は、５Gの技術の破壊と妨害をする技術を陰に陽に内蔵する通信技術となるでせう。これが論理層での世界戦争です。

さて、さうであれば、２１世紀型帝国主義国家（標榜するのは自由と民主主義）と、１９世紀型帝国主義（標榜するのは中国共産党の絶対支配による全体ファシズムの中華帝国主義）と世紀の型で分けるのが良いかも知れない。

さて、問題はヨーロッパである。イギリスがBrexitした後の、または今呼ぶにせよイギリス抜きのヨーロッパを大陸ヨーロッパと呼ぶことにする。同じことは、Japanexitした/しつつある（ベルリンの壁ならぬ東京の壁空間を離脱した）日本の残りのアジアを大陸アジアと呼ぶことにします。

どうも最近のドイツの国会を巻き込んでの異様な（と私からは見える）環境保護運動などの欧州情勢を見ると、EUといふ大陸ヨーロッパは２１世紀型のメタ帝国主義ではなく、旧態依然のEUといふ名前のキリスト教圏・経済共産主義同盟にとどまつてゐると見える。ドイツのEU離脱であるGermexit（Deutschexit）やフランスの同じ離脱であるFrexitの勢力が今よりももつと強くなれば、各国独立主権の２１世紀型の国家主権を回復した帝国主義になるだらう。これが本来の１７世紀来のヨーロッパの姿です。

といふことは、ヨーロッパ地域は１７世紀のウエストファリア条約の時代に戻るだらう。もつとも今は移民の流入、難民の流入で混乱と擾乱騒乱を極めるのは必定であるが。つまり、結局１７世紀の３０年戦争はない代わりに、規模の小さな、そして恒常的な騒乱と擾乱を各国は抱えることになるといふことです。日本帝国は一体どうするつもりだ？私の一庶民としての意志は今や、打倒現政権である。今、日本に固有の第三項としての政治形態を思案することができる筈です。何故第三項かといふと、民主主義でもなく共産主義でもない、これら二項対立を超越した、縄文紀元以来の超越論（哲学）とtopology（数学）に基づく第三項としての政治形態を私たちは考へることができるからです。

さて、諸処既述の私の所説をくりかへせば、今は国際的なバロック時代です。始まったのは、これも幾たびも既述既論の通りで、遺伝子の二重螺旋構造の発見された１９５１年以来、これ以降はバロック紀元です。多分、少なくとも２１世紀一杯は。となると、このヨーロッパの歴史的時代の視点で命名したバロック紀元は２１世紀型のEXIT帝国主義の時代でもあるといふことになります。

さて最後に、最近の国連決議によるウイグル弾圧反対決議（2019/10/29ジュネーブ発AFP外電）に賛成が２３か国、反対が５３国であるので、EXIT帝国（総勢２３か国）versus 中華帝国＋アジア・アフリカ等諸国といふ国際政治勢力図です。ロシア帝国がどちらに入るのか？中華帝国陣営に入ることはないので、さうであれば政治的打算によつて（政治的打算は悪ではない）、アメリカ帝国と手を結んで、同時にヨーロッパ離脱といふことから結局はEXIT帝国になるといふのが私の見立てです。

たとへAFPによつて次のやうに中国共産党を擁護する側に廻つても、です：

「これに対し、ロシアやサウジアラビア、ナイジェリア、アルジェリア、北朝鮮など、37か国のグループは12日、中国政府に代わって共同書簡を公開。ミャンマーやフィリピン、ジンバブエなども署名した。
　この書簡には、「われわれは、人権の分野における中国の顕著な成果をたたえる」「テロリズムや分離主義、宗教の過激主義が、新疆の全ての民族に多大なダメージをもたらしていることにわれわれは留意している」と記されている。
　国連人権理事会では通常、各国が非公開の席で交渉し、公式決議を作成しようとするため、公開書簡の形で応酬する事態は珍しい。」
(https://www.afpbb.com/articles/-/3235042)

当たるも八卦、当たらぬも八卦。

これを国際政治の階層から日常生活に生きる個人の、あなたの階層に落として（還元して）あなたに問へば、次の問ひになります。

問：あなたは離脱派（Leaver）か？それとも残留派（Remainer）か？
答：

２２歳の、『詩と詩人（意識と無意識）』に書かれてゐる安部公房流に云へば、上記答へ欄は、あなたが自分に固有の人生を生きるために空白にしてあるのだ。といふことになります。もしあなたが視覚的な人間であるよりも、聴覚的な人間であれば、空白を沈黙と置き換へて、時代と自分との関係を御考へ下さい。

ところで、一体何から離脱するのかつて？

答：勿論、箱からである。

サンチョ・パンサを求めて
（４）
～君の中の「君」へ～

岩田英哉

１。第一信

如何お過ごしでせうか。

何度か最近ドイツの報道を見て、ドイツといふ国の環境保護の推進といふことを、上はベルリンの国会議事堂の政治家から（特に極端なるものは緑の党）、下は庶民のデモ行進に至るまで狂気の沙汰だといつてきましたが、今日配信のあつたネット雑誌「COMPACT」（2019_11号）の表紙を飾る特集の題名が「気象問題の狂気と終末思想のセクト」といふのです。今月号をネットで買ったので表紙と記事の当該１ページを添付します。



国連で環境問題について演説したスウエーデンの１６歳の少女



ベルリンでのデモ行進



同時にYouTubeで編集長（とおもはれる非常に良識のある男性）と取材をして記事を書いた部下の編集者またはジャーナリスト（この人もまた常識のある）二人の対談があるので、ドイツ語ですが/ので、何よりもまづ顔を見てもらひたい。

日々のネット上のマスメディアに出てくる（地上波の延長にある報道番組での動画の）Interviewees（インタヴュー受け者）は街頭取材も含めて極端で非常識な連中が多いのは日本と同じなので、ドイツの国情を心配してゐたのですが、かういふ理性的・論理的・常識的なドイツ語を話すジャーナリストがゐることに安堵しました。この雑誌の読者になつたので、必要な号は購入して読みたいと思ふ。必要と思へば貴君に解説して届けます。動画のURLはここです：

https://www.youtube.com/watch?v=pU_XezeeHUQ

まだ冒頭しか視聴してゐませんが、雑誌のページにある上掲の真っ赤な衣装を着たカルトは、記者によればベルリンのみならず、ロンドンとパリにも出現して、目抜き通りで行進したので交通渋滞をいづれも引き起こしたと述べてゐます。それ故に雑誌本文では非合法の活動だと書いてゐます。ドイツ語の語法から云つて、非合法のデモだったのではないかと察せられる。即ちそのやうな勢力なのです。日本にゐる極左・左翼・共産主義勢力と同じ流行の中にゐるのです。カルトです。

この記事の分析の正しくまた鋭いのは、これは「退廃した（デカダンスのーなんとまあ、懐かしい言葉であらうか）ブルジョアの自己憎悪」だと明解に断言してゐることです。全くその通りです。これが「死のカルト」の正体です。終末思想と選民思想のマルクス主義を唱導した連中と変はらないのだ。記者曰く１９７８年にも南米でも同様のカルト宗教が死んだ事件があつたといひ、それ以降このカルトのあり方はヨーロッパでは変わらないのだと述べてゐます。南米の事件はアメリカ人の教祖ではなかつたかと記憶するが、さうであれば、これは欧米共通です。といふことは日本も同様かと当然に疑ふことは必要ではないか。今実見できないとしたら、必ず遅延して現象になつて現れると考へて今から準備をしておいた方が間違ひがない。否、既にオウム真理教の地下鉄にサリンを撒いたテロ事件を含む一連の時件が起きてたのは１９９５年、このカルト教団が猛威を若者たちに奮つて文字通りに世間を騒がせたのは１９８０年代末期から１９９０年代中期でした（https://ja.wikipedia.org/wiki/オウム真理教事件）。といふことは、カルトの顕在化はこの時期からです。この時間的同期性は後述するドイツとアメリカの正副大統領職の人間達の環境問題を巡つて活動時期と重複してゐる。

といふことは、ネットの今の時代であればこそ、人間の意識も同時多次元中継になるので、ドイツとロンドンとパリで起きたことは東京でも起きてしまつてゐるか、早晩起きると考へる方が最善の策であるといふことになります。

記事もドイツ語しかなくて申し訳ない。翻訳する余裕が今ないのです。記事はGoogle翻訳にかけてください。もしネットでドイツ語ー日本語の無料翻訳があれば、あるひは英語への翻訳サービスがあれば、それで視聴して見てください。

取り急ぎ、以上お知らせまで。これは動画を見て、また記事も精査して、僕も分析し、必要な翻訳も用意して、その上で次号のもぐら通信に原稿を書きます。

ところで、我日本国に同類はないか？、即ち記事にいふ、

（１）自己憎悪の中産階級（ブルジョア）
（２）終末思想による死を願ふカルト［これは自分の死が世界の死であることを願ふ憎悪です。人々の心に死の恐怖を煽り立てて支配したいといふファシズムの原因・動機と同じだ。唯一絶対神がゐないので自分が自分自身の死に対して恐怖心を抱いてゐることが正視

できない。］

これに当たる者は何か、誰かと今自問自答したら、見つけたよ。
（１）大学の学術の世界にゐる学者たち（曲学阿世の徒である）
（２）高校や中学校や小学校の日教組の教員たち：自己憎悪が日本の国憎悪になつてゐることに気づかない（私は親しい複数の人間がゐたので経験的に事実としてよく知つてゐる。何故そんなに自分を憎むのだらうと不思議で仕様がなかつた。こんな人間たちにものを教へる資格はない。）

これが教育の場であるとすれば、次は政治の場では、

（３）与野党を問はぬ、僕が一匹二匹と猿を数える単位で数えてゐる以外にはないパフォーマンスといふ芸好きの御笑ひ国会議員たち（さう云へば上記（１）のマス・メディア露出の頻繁な曲学阿世の徒は吉本興業でマネジメント（管理）してゐるものもゐるさうな）
（４）マス・メディアの不見識の自称記者または自称ジャーナリストたち
（５）自称保守人間にもゐるのではないのか？（と疑つて見ることだよ。ゐると思ふな、特に親米保守などを自称してゐる輩に。）そして、
（６）更に恐ろしいことだが、庶民の中にも。僕の隣にも。

まだ、まだ、ありさうな気がして、恐ろしいな。

では、また。今日のところは、これまで、so weit für heute、ゾーヴァイト・フュア・ホイテ。

２。第二信

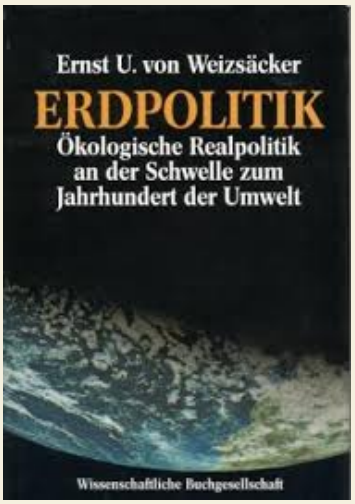
君に第一信を出した後で、ドイツ文学史を久し振りで思ひ出したのだ。こんな地球温暖化環境保護運動の文脈でドイツ文学の知識が生きるとはおもはなかつたよ。つまり、ずつと気になつてゐる一冊の本があるのだ。

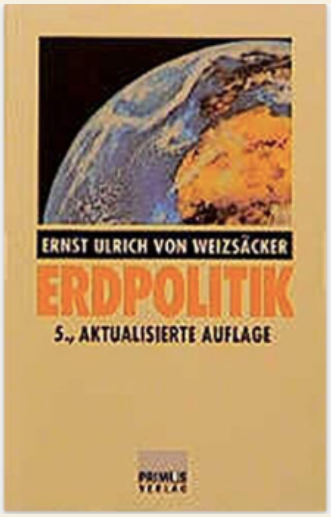
それは、１９９７年にドイツの当時の大統領ヴァイツゼッカーの書いた『地球政治：グローバル化に対する回答としての環境保護の現実政治』（『Erdpolitik: Oekologische Realpolitik als Antwort auf die Globalisierung』）といふのだ。何故興味を持つてドイツの本屋から取り寄せたかといふと、何故一国の大統領がこんな題名の書物を著すのか不審に思つたからです。これはドイツ語のほぼ直訳なので、もう少し言葉を費やして訳出すれば、地球政治の原語は、今流行のグローバルの語幹であるグローブ即ち地球といふ意味なのです。要するに英語に直せば、Globepoliticsといふのが此の本の主たる題名なのだ。それに副題として「グローバル化に対する回答としての環境保護の現実政治」といふ組み合わせで、この良くわからない「現実政治」といふのは造語です。これはいづれにせよ現実と政治を結合した造語です。今その接着剤が環境保護といふ訳。ドイツ語のWikipeidaによれば、これは次のやうな歴史的文脈と政治的文脈で其れ以前から使はれて来た用語です：

「レアルポリティーク、現実政治（ドイツ語：Realpolitik）は、ルードヴィヒ・フォン・ロハウ（wikidata）が1853年に提唱した[1]、イデオロギー、理想、倫理ではなく利害にしたがって権力を行使しておこなわれる政治のありかた[1][2]。国家間の外交においては執拗な国益の追求と関連する[2]。ロハウなどによると、「力の自然法則の現実」によって導かれるオットー・フォン・ビスマルクの外交政策をレアルポリティークの概念はよくあらわしている[3]。
John Bewによれば、強者は正当性だけで打ち倒せるものではなく権力と政治を理解して現実的な手法で目標を達成しようとすべきだということを革命に失敗したリベラルに向けて説いたのがロハウの当初の意図であり、現代の「レアルポリティーク」の解釈はそこから乖離している[4]。

脚注：
[1]高野 清「トライチュケとビスマルクの「現実政治」(Realpolitik)：トライチュケ研究のための一つの試みとして」岡山理科大学紀要2, 99-109, 1966
[2]realpolitik | political philosophy | Britannica.com
[3]Cathal J. Nolan, The Greenwood Encyclopedia of International Relations: M-R, 2002.
[4]Jason Steinhauer, Real Realpolitik | Insights: Scholarly Work at the John W. Kluge Center October 24, 2014」
（https://ja.wikipedia.org/wiki/レアルポリティーク）

私の持つてゐる此の本の表紙と、今アマゾンで掲載されてゐる表紙の二つを並べます。





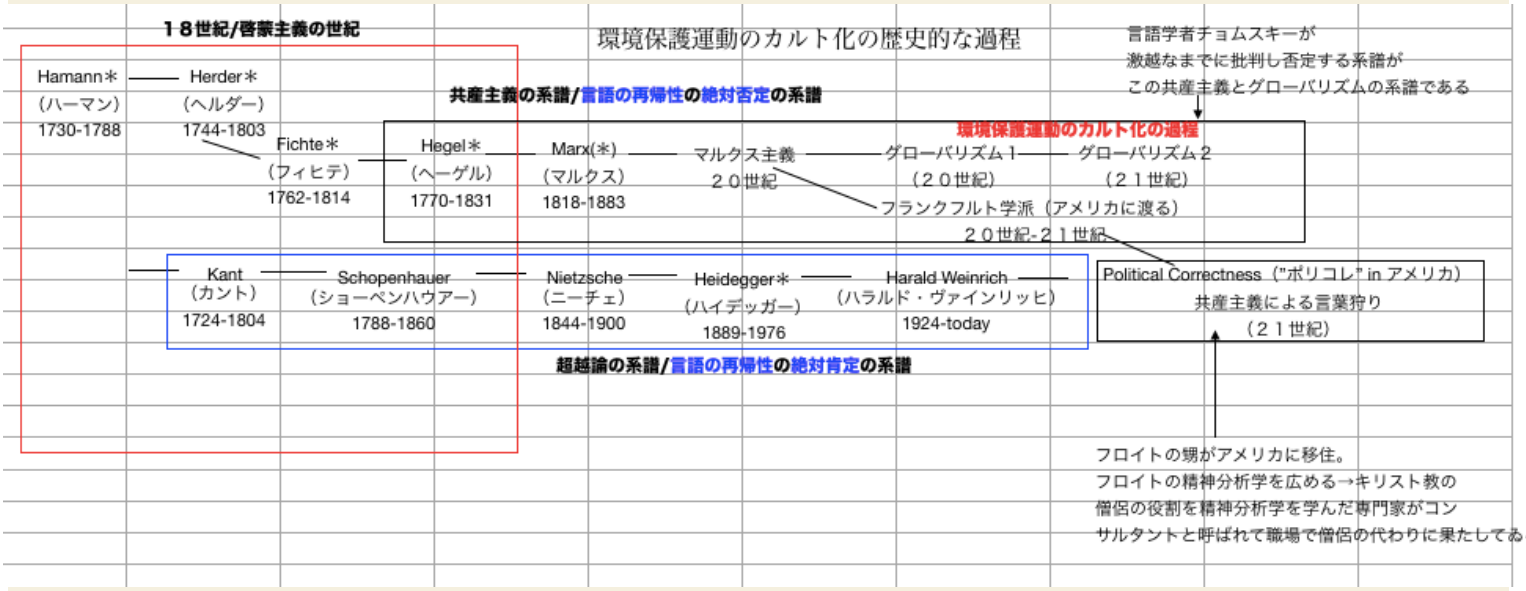
左が私の持つてゐる本の表紙、右が最近の表紙です。左の地球は、アポロ宇宙船の飛行士たちが地球の上空で撮影した写真と同様のもので誠に地球は瑞々しいしく美しい惑星として写つてゐるのに対して、最近の右の表紙は、地球がもう生命力を失つて枯れ果ててゐる地球のイメージを、これは多分故意に茶色に着色して写真を改竄したのではないかと思ふ可笑しな地球の姿を使用してゐる。しかし、最近のYouTubeでの報道を見ると、非常にヒステッリックにドイツの国会や街頭のデモ隊や、それに先日の国連での１６歳のスエーデンでの少女の演説（！）でのあの姿は、正しく今のドイツ人とヨーロッ

パの人間たちの姿そのものであつて、これは環境保護運動のみならず、他の分野にも及ぼすことのできる枯れ果てた滅びる寸前の地球の形象（イメージ）です。ドイツがこれだけ疲弊してゐるならば、といふことはヨーロッパがさうだと言ひ切つて良い。何故ならドイツはEUの中心国であるから。
付言すれば、子供を利用するといふ偽善は極左・左翼・共産主義者の常道です。一体１６歳の少女に、それも国際政治といふ政治の場である国連で、演説をさせるといふ大人たち（政治家と行政官僚でありませう）の幼児化、幼稚化、分別のなさといふものは極まつたといふべきです。問題なのは、これが日本でも同様だといふことです。



国連で演説して、［気象環境問題を解決せずに、これから先の人生と命のある］”私たち子供を幻滅させることがあつたら、あななたちを赦さない”と主張して、ゐ並ぶ大人たちを恫喝する１６歳の少女の横顔

さて、ここからがドイツ文学史を以て、国際政治と思想の系列を洗ひ出してみようといふのです。次のやうな連鎖が、少なくともドイツにはある。といふことは他の諸国にも大なり小なりあると考へて下さい。それぞれの国と民族と言語の専門家には、この「環境保護運動のカルト化の歴史的な過程」図を見て思ひ当たるものがあることでせう。ダウンロードは：https://docdro.id/6TQulED



ゲーテの若い時の「疾風怒濤」（シュトルム・ウント・ドラング）と文学史上呼ばれる文学的運動と其の時代に関して師匠筋にあたるヘルダーがかくあれば、ゲーテにあつても同様かと思つてゲーテ全集にあたると、ゲーテには地球といふ語にこのやうな使用例はなかつた。やはり文の人であり、本人はワイマール王国の行政官も務め、宰相にまで

なつた政治家でもあるが、そのやうな妄想の論理がないのは、やはり政務の実務家であり現実的にワイマール王国の民のための政治を司らねばならない政治家であつたからでせう。といひながら、ゲーテが水道局の局長であつた時に、ゲーテの所有する夏の別荘の近くの土手に穴を貫通させて愛人の何某夫人へのお忍びのための近道をつくらせたといふのは、まだ冷戦時代の２０代に此の別荘を私が訪れた時の観光ガイドの解説ではあつたのであるが。

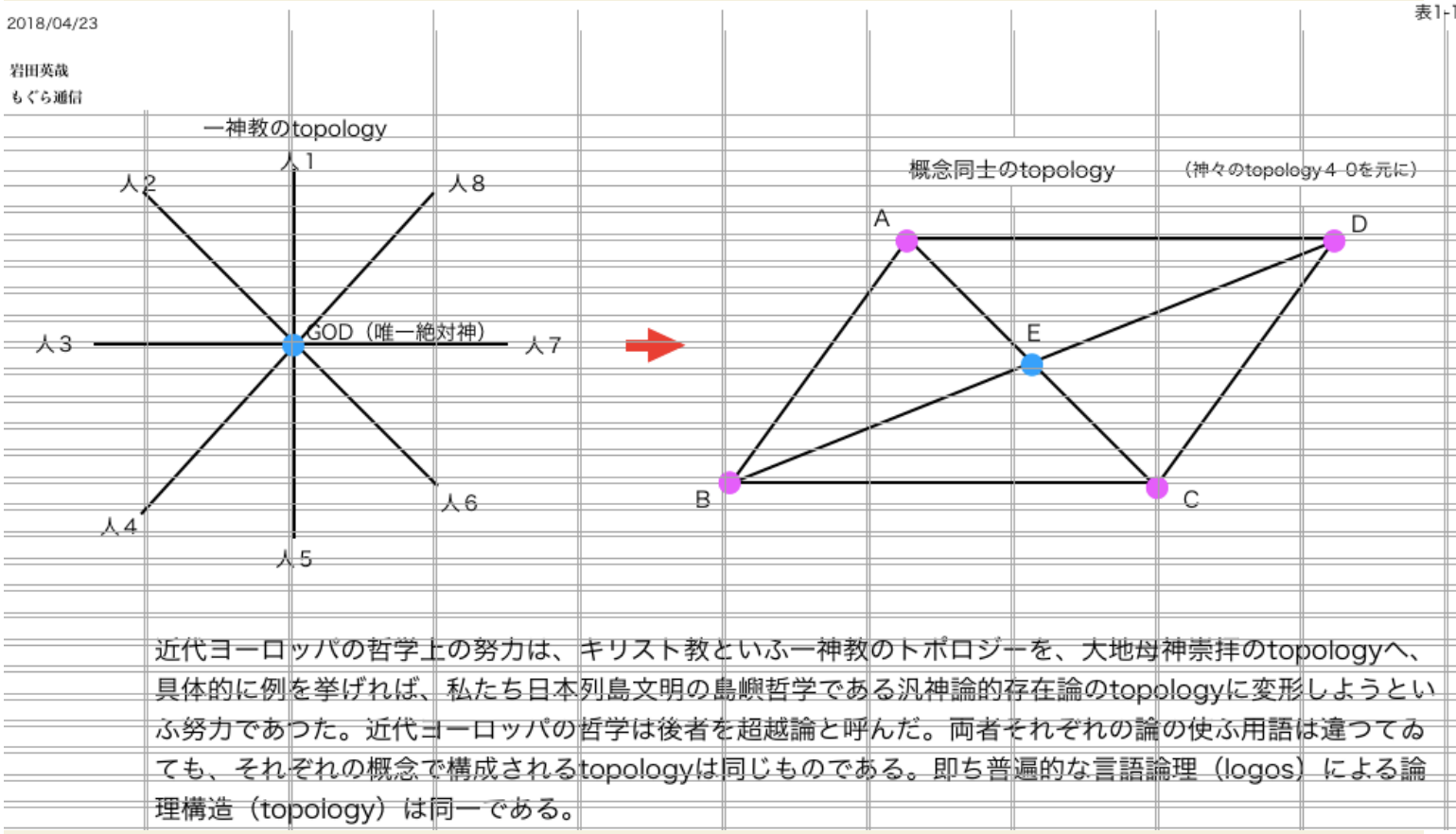
しかしそれにしても、他の諸邦諸州も含めたドイツ全体として見れば、やはりドイツの国も上記の時系列に挙げた名前を見れば、１８世紀の啓蒙主義以降は、キリスト教の教義の蒙を啓くといふ意味で啓蒙時代と自らの文明の時代を呼んだにせよ、しかし自らもまた正気を失ふ歴史であつた。これが、ドイツのみならずヨーロッパの近代であることは、このカルトの記事から私の読みとることのできる、今に至るまでの歴史的事実である。狂気はいつの間にか少しづつ何かに誰かに沁み込んで来るやうだ。

この系譜の連鎖とともに、このやうな哲学の系譜から生まれた科学の系譜もあり、従ひ、論理的な根拠を欠いたエセ科学であるカルト科学も同様にあるといふことになります。その現象の一つが、この「環境保護をせよ！絶叫ー本当に絶叫してゐるー共産主義グローバリズム・ヒステリー」である。もはや、安部公房が作品を書くときの前提にしてゐた、世の中は精神病院に同じであつて精神病の患者が徘徊してゐるのだといふ舞台設定は国際社会でいよいよ現実になつたといふことである。

大体私たち日本人の感覚と論理から観れば、自然環境の保護といふ理屈がおかしい。自然が私たちを内包してゐるといふのが私たちの自然観です。大体保護といふのは管理（コントロール）するといふ考へであるが、本当に自然を管理することなどできるわけがないのです。自然は人間の管理（コントロール）の外にあるといふことが何故理解できないのかといふ問ひを立てると、やはり旧約聖書の冒頭の創世記に戻らざるを得ない。それは唯一絶対神である世界の創造主が人間を自然の管理者に命じたからである。これが、ヨーロッパ人のこの唯一絶対神からの離反を原因とすることによつて正反対に結果した環境保護運動の擬似宗教化、擬似キリスト教教義化、イデオロギー化の実現といふカルト集団のデモ行進なのです。擬似をエセと呼んでも良い。

問題は、上記の哲学の系列中の名前に＊のつけた人間に共通してゐるのは、みな学生の時に大学でキリスト教の神学を学んでゐるといふことです。宗教の問題として神学を学ぶのは良いが、自分個人の名前で思想を唱導する時に、見かけ上は反キリスト教であり否キリスト教であり非キリスト教であり離キリスト教であつても、同じ一神教のトポロジーの論理、即ちトポロジーの中央に置いた理念を絶対のものとして恰も自分の思想が唯一絶対のものであるかの如くに此の論理を理念だといふ名前で呼んで此れを主張し、

善意を以て提唱し唱導するといふのは本人が善意に満ちてゐるだけに狂気であるといふことは、私たちが日常でも御笑ひ国会議事堂での国民の利益に反する法案の多数決による承認や街頭の演説やビラ配りなどで実際に見聞きして知つてゐることである。マルクスも同類の人間であつて、生まれ育つた家庭がユダヤ教のラビの家であるといふのであれば、幾ら本人が宗教を否定しても、一神教のトポロジーは骨身に染みてゐることは疑ひを容れないので（＊）を付しました。実際旧約聖書のシナイ山での唯一絶対神のモーゼに対して話す際の口吻を真似た文章のあることは既に『安部公房とチョムスキー（９）』（もぐら通信第８２号）で指摘した通りです［註１］。



［註１］
「追記：余計な１ページを割いての余計な一言

まさか、ここまで書いてみるとは思ひがけないことでした。ショーペンハウアーに比較をすると、 マルクスのドゥンス・スコトゥス理解は哲学者のものではありません。しかし、何故ここまで物質に拘（こだ）はるものなのか？何でも物質で説明しようといふことになれば物理学といふ科 学を学ぶ以外にはない。

わたしの若年の時からの疑問は、何故マルクス主義に心酔し又は共感した特に団塊の世代の今 の７０歳前後からの人間たちは（勿論上掲のYouTubeにあつたやうに若い学生でもよく講演者 の年齢でも良いが、この種の人間は）、自分自身をそのやうに憎むのかといふ疑問です。そして その憎悪を自分では感じてゐないし知らないといふ矛盾と、その憎悪を外部へと向けて恥じな いといふ道徳を失つた幼児性。やはりその人間の持つ死に対する恐怖心を煽情され利用されてさうなつたといふのが私の結論です。

マルクス家は代々ユダヤ教のラビであり、マルクスは長兄の夭折により長男の地位を占めてゐた ことが関係するのかも知れない。しかし尚、このやうに偏執的に物質だけで考へるマルクス個 人に固有の何らかの契機がある筈。と考へて来ると、マルクス主義のヨーロッパでの運動は、ユ ダヤ教とキリスト教の戦争であつたといふことになる。この物質に対する偏執性は、ヘーゲルの 否定論理和に対する偏執性に通じてゐます。YouTubeのアドルノの講演者の言葉を聴いて知るに至つた狂気にこの偏執性は生きてゐると感じる。きつとあの中年の講演者の男も、笑ひ声をあ げた学生達も、想像するだに恐ろしいことであるが、機会と場所と社会的な地位が与へられた ら、きつと笑ひながら、あるいは嗤いながら、人を平気で殺すことのできる人間なのではないだらうか。何故なら、脳味噌で考へる論理を他の人間たちと共有しなければ、人間は自然を理解できないと公言して憚らないのであるから。

何故、共産主義者は人間をこれほどまでに憎むのだらうか。

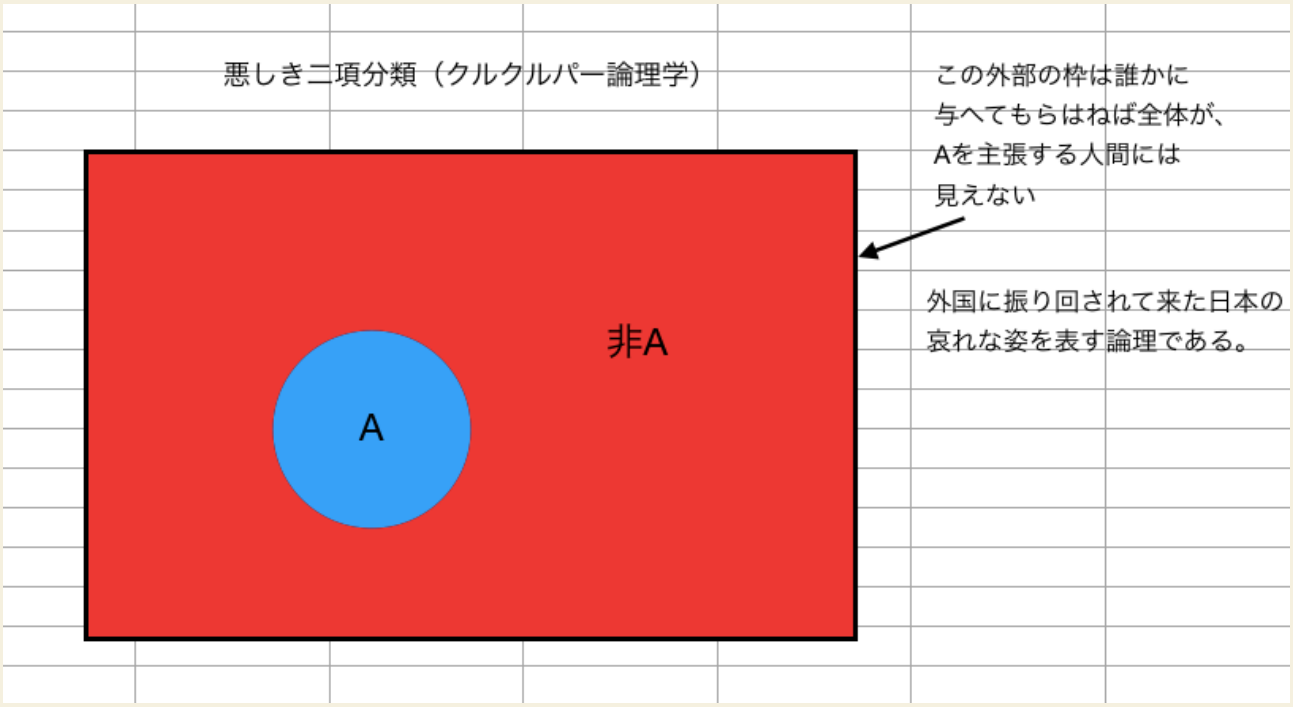
八木さんの言葉でいへば、マルクスのドウンス・スコトゥス理解が偏頗で浅薄であることから判明したやうに「近代ヨーロッパが十分な根拠もなしに中世の精神的仕事を闇に葬ってきたこ と」、ヨーロッパ地域の歴史と文化と伝統の継続性をないがしろにしたこと、これがその大 きな原因の一つです。もう一つの大きな原因は、アラビアの世界、イスラム教徒から古代ギリシャとローマの遺産を教へてもらひながら、それに感謝の意を表することなく、この中世最後期の 歴史を捏造して、自分たちが歴史的事実とは無関係に、イスラム教文明の力を借りることなく独自に近代文明を創造したといふ嘘を信じこまうとした中産階級（ブルジョワジー）の富裕な（資本家を含む）商人たち、政治家たち、文化の領域の人間たちの捏造した歴史に対する偽善と欺瞞が、この憎悪の原因です。もし中世のスコラ哲学を学んだことを、八木さんといふ方のいふやにこれらの人間たちが大切にしてゐたら、ヨーロッパの人間たちはもつと少しは謙虚でゐられた かも知れない。これについては『メタSF作家A氏への五つの手紙』(もぐら通信第７１号）で論 じましたので、お読みください。」
（『安部公房とチョムスキー（９）』（もぐら通信第８２号））

（以下このページは余白）

以上の事実と考察の意味するところは、結局哲学と云ふ学問だけでは国家は生まれない（当たり前ですが）、哲学は国家を産むのではないと云ふことであり、従ひ産むことがないのであるから哲学だけでは国家経営はできないと云ふことであり、それぞれの民族が自らの国家誕生の由来、国の出生の由（よ）つて来たるところに従つて国を造り国家のことを考へることがなければ、健全な（と敢へて此の形容詞を用ひます）国家にはならないと云ふことが、この今のヨーロッパの、しかもEUの、１７８９年のフランス革命以後２１世紀の今日の各国の惨状が証拠立ててゐます。プラトンのいふ哲人国家はユートピアであつて、これはこれで一つの理想像で結構ですし大事なモデルでありますが、やはり現実の政治は本当に職業的な専門家である、国益といふ国民と国家の利益を考へる能力のある人間が政治を司る以外にはないといふことです。これは、このやうに考へれば、その政治形態は民主主義に於いてさうであるのみならず、他の政治形態にあつても同じだといふことになります。但し、当然に共産党を含む共産主義および同類の独裁的全体主義ファシズム国家を除いては。

閑話休題。

さて、この問題になつてゐる（傲慢にして無礼極まりない）自然環境保護の彼らの論理は、私がクルクルパー論理学といふAまたは非Aといふ（頭を使ふ必要のない）悪しき二項対立のさせ方です。この論理が有効な場合は、誰かに全体の枠を示してもらつて、それに同意する場合だけです。しかし、彼らの行動の原因が自分自身に対する憎悪であるのであるからには、そんなことは期待しても無理だし、話し合つても解決には至らないのは自明である。国家が合法的な暴力即ち強権を以て解決を図る以外にはないのです。さうしなければ国家は憲法に定められてゐる大多数の国民の生命と安全と財産を護ることができないといふ無残な話になる。「近代国家構造模型図」をご覧ください（ダウンロードは：https://www.docdroid.net/eXzBq09/v10.pdf）今の日本の国にこれができなければ、今の日本は国家ではないといふことです。海外に合法的な暴力の執行を権力（政府・行政府）ができなければ、国内に於いても同様ではあるまいか。なんといふ国であらうか、大和の国は。うまし国ではなかつたのか？言霊の幸はう程の。ああ、情けなや、情けなや。愛知トリエンナーレの「表現の不自由展」をめぐる不祥事を思へば、古いギャグだが、アート驚く為ゴローであるよ。道義、道徳に反すると一言いへば、それでお仕舞である。此処にあるのも、Aか非Aといふクルクルパー論理学である。自由か不自由か。そして非Aが常に盲目的に正しいと主張するのであるが、こんな主張には人間の脳味噌はゐらない。高度に抽象化と概念化する能力を要する藝術家に脳味噌がなければ、それは藝術家とは呼ぶことはできず、従ひ、其の作品は藝術ではない。どんな異常に見えてもまた偏奇なものであつても、其の作品が藝術であるならば、根底には道徳が、その道徳が否定されるにせよ肯定されるにせよ、必ずある。道徳を、物事の正しさの在り方との関係で、道義と言つても良い。



問題なのは、この飛躍した論理が既に上記哲学系列図の最初にあるヘルダー（Herder）にあるといふことなのです。これから私のいふことを聞けば、一体あの人類のための崇高な理念は一体なんであつたのだ？と２１世紀の今になつて、明治時代以来の欧米盲信崇拝人間の日本人は腰を抜かすことでありませう。あなたが其の一人ではないことを願ふ。もし其の一人であるならば、眼を覚ますことを祈ります。

さて、以上の文脈を頭に入れた上で、ヘルダーの論理の飛躍、即ち私のいふ悪しき二項分類で書かれた著作の題名と目次をご覧ください。既に此処にヘーゲルが生まれてゐる。

『人類史の哲学のための諸理念』（原題『Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit』）この著作は第４部まで構成されてゐる。

全部で４部からなる部門のうち第１部の章立てにある目次を訳します：

第１巻第１章：我々の地球は星の中の星である
第２巻第１章：我々の地球は非常に多岐に亘る生物の組織化のための一個の大きな（または偉大なる）工場である
第３巻第１章：人間が組織化をすることを考慮した場合の植物と動物の組成・組み立ての比較
第４巻第１章：人間は元来理性能力あるやうに組織化されてゐる
第５巻第１章：我々の地球の創造には、一連の上昇する（いや増す）諸形式と諸力があるのだ

このやうな章立ての見出しは、とても私たちには思ひも寄らぬことです。

私が上記の訳出で言ひたいことは、ドイツ国外を思ふと即座に地球といふ言葉になつてしまふと云ふ論理の飛躍のあることです。ドイツとドイツ以外の後者を思ふと、隣国やヨーロッパ地域を超えて途端に全世界を思ひ、それも唯物論的に地球を思ふ。そしてそれが人類の歴史にとつての理念といふわけですから、人類史上最高の理想の想念といふ意味であり、これを思考するのが哲学である。とヘルダーは言つてゐるのです。これはこのままその後のヘーゲルから/に連なるマルクス主義やその共産主義の末流であるポリコレ（political correctness）や此処で論じてゐるエセ宗教のカルトに至るまでに、これを成長と云ふのか、否、頽落といふべき惨状にまで至つてゐる。

しかし、上記に冒頭引用した常識と良識のあるジャーナリストたちがゐて、このやうな月刊誌を発行してゐるといふことに、私は安堵しました。このやうなジャーナリストや編集者はマス・メディアには登場しない。この事情は日本と同じです。やはりネット・メディアであるが故の此の発見と言ひ、もし実際にドイツで会つてゐたら良き知遇を得たといふべき二人でありませう。

さあ、君に、此処まで来て問ひたいのだが、

私たちは、そして君は、こんな世の中を/でも生きるとしたら、一体どのやうに生きるべきなのだらうか？

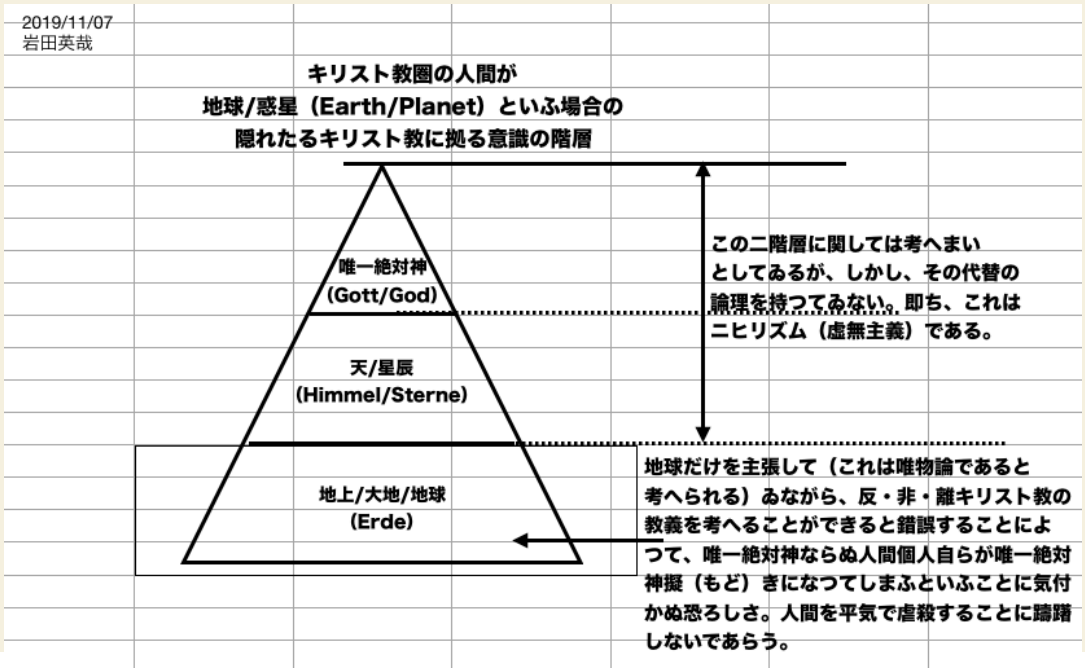
追伸：
アメリカのクリントン大統領の時であつたか、ゴアといふ副大統領がゐてやはりヴァイツゼッカーと同類の『不都合な真実』と云ふ本を書いてゐて（２００７年）、映画にもなつて、ご本人はノーベル平和賞を受賞してゐる。これは後日知つた伝聞情報であるが、この副大統領は別の出資者と共同で環境問題（と称する問題）の解決を促進する技術かサービスを提供するヴェンチャー企業を創設したさうな。政治家であつてもし利益相反を問はれるといけないと考へたとしても、顧問か何かになつて金寄せパンダの役割を国際的に演じて見せたと云ふことになる。そして実際にさうでした。とすると、ヴァイツゼッカーも同様に金儲けを利権を作つてしたのではないかと疑ふことができる。と云ふことは、なんとまあ、このやうに政治家といふ職業人（professionalである）疑つてしまふ浅ましい我が身であることか。と同時に、もしさうなら、このカルトの後ろにも利権があつて、大きな金が動いてゐると云ふことになります。これを、有り難くも正確に事実ばかりの記述に満ちたる文部科学省検定合格の尊き義務教育用教科書によれば、平安時代と同じ末世といふのではあるまいか。誰か平等院鳳凰堂のやうな寺院を建立し奉納したといふやうな貴徳な御仁の話を聞いた方がゐたらご一報願ひたい。南無阿弥陀如来。

追伸２：
また、追つて思つたのだが、何故こんなカルトの出現し、出現どころか魑魅魍魎のごとくにロンドン、パリ、ベルリンといふ近代文明の三大都市、近代国家の三大首都に出現したのかといふ原因の説明と理解のための図を描いたので、君に見てもらひたいのだ。

これで一体どれだけキリスト教といふ宗教と、其の宗教に深く関係して日常使はれる言葉によつて、ドイツの、ヨーロッパの人間は意識と無意識と思考論理に制約を受けてゐるかを読み取つてもらひたい。勿論、限界と制約のないところに文化の生まれる筈はないので、僕はキリスト教を否定してゐるのではない。

僕の言ひたいことは、インド人にとつてのカースト制度と同じで、カーストがなければインドの社会も国家も崩壊するだらうやうに、否、それ以前にインド人個人が生きて行くことができないだらうに。同様に、キリストの教へがなければ（基督教会といふ腐敗した組織の問題はまた別だ）、本当はこの人たちは生きていけないのではないのか？といふことを心配してゐるのだ。信仰といひ、信心といふことは、私たちが生きて行く上でとても本質的に必要としてゐる、普段の意識無意識に拘らず、大切な事だからです。

レヴィ・ストロースみたいに日本に来て神社に参詣してご覧なさいといふことです。いつぞや数年前のG7の各国首脳が伊勢神宮に参拝したなどといふのは本当は世界史上の一大事件であるのに、歴史を忘れ呆けた日本のマス・メディアは其の意義を報じもしないし、そもそも解説ができないという無残なことでした。彼らはEarth（大地、地上、地球）と云へば、天を思ひ、その上の唯一絶対神を思ふ、無意識にでも此の図の三階層を思つてゐる、即ちお祈りしてゐるのだ。まあ、あの真つ赤な衣装に真つ白な化粧をしてゐる歩くゾンビたちは、自分の文明と文化の根底にあるこの言葉の構造を否定したので、ああなつてしまつたのだな。南無阿弥陀仏である。この図のダウンロードは：
https://docdro.id/rn2S5dq



ネット・メディア論
（３）

岩田英哉

目次

０。はじめに
１。国家とは何か
２。用語の定義
３。メディアとは何か
３.１　マス・メディアとは何か（２０世紀）
３.１.１　世界観としてのマス・メディア（一神教のtopology）
３.１.２　マス（mass）とは何か
３.１.３　マスとプロパガンダ
３.１.４　マス・メディアとプロパガンダ
３.１.５　１９４５年までの日本国家と１９４５年以後の日本国家の関係
３.１.６　マス・ジャーナリズムとは何か

３.２　ネット・メディアとは何か（２１世紀）
３.２.１　世界観としてのネット・メディア（超越論のtopology）
３.２.２　ネットとは何か
３.２.３　ネットとプロパガンダ
３.２.４　ネット・メディアとプロパガンダ
３.２.５　ネット・ジャーナリズムとは何か

４。ネット・モナド論
４.１　モナドの概念と定義
４.２　ネット・モナドの概念
４.３　ネット・モナド(personal)の定義
４.４　位相観（鏡）に大量複製はない
４.５　象徴とsymbolの関係再説
４.６　メデイアとしての三種の神器：三種の神器に共通する概念は何か

５　公私とは何か
５.１　公私の最小単位
５.２　マス・メディアでの公私とは何か
５.３　ネット・メディアでの公私とは何か
５.４　一神教の公私
５.５　大地母神崇拝（超越論）の公私

６。二階層戦争論とメディア論の関係
６.１　ネット・メディアの問題を二階層戦争論で考察する
６.２　ネット・ヘゲモニー問題とは何か
６.３　二階層戦争論による解決策

７。政治形態と自由
７。１　自由とは何か：libertyとfreedomの違ひ
７.２　公私の最小単位再説
７.３　政治形態E&Aの公私：一神教のtopologyの政治形態
７.４　政治形態Jの公私：高天原のtopology（超越論）の政治形態

８。私たちは如何に生きるべきか
８.１　学歴無用論
８.２　学問有用論

青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字は此れから論じる章

＊＊＊＊＊＊

４。ネット・モナド論

４.１　モナドの概念と定義

第３章の最後に、

【結論】Mobile（スマホ）を携帯してゐるあなたは、ネット・モナドである。

と私は書きました。

『ネット・メディア論：マス・メディアとは何か（２０世紀）』（もぐら通信第１０７号）よりモナドの定義を引用します。

モナドの定義

モナドとは、は社会（物理層）およびネット（論理層）の二つの層に存在する 全ての価値の単位である。モナドは大か小に、全体か部分に、１か多数かに拘らず全て等価で遍在する人・物・事に関する価値の単位である。

［補足説明］

このモナドには二種類あり、一つ は１７世紀のライプニッツの思ひ描い窓のないモナドであり、もう一つは２０ 世紀の安部公房が思ひ描いた窓のあるモナドである。前者を閉ぢたモナド（Closed Monad）、後者を開いたモナド（Open Monad）と呼ぶことにする。即ち、

モナドには、閉ぢたモナドと開いたモナドの二種類のモナドがある。

４.２　ネット・モナドの概念

そして、これは一つのモナドの両面両態であつて、互ひに少しも矛盾しない。何故なら私たち日本人がものを見るときには位相でみるのであるから、モナドを考へる場合には、私たちはモナドを位相で観る、即ち超越論で、言つてみれば、私たちが月読命になつて、恰も月の満ち欠けをみるが如くにモナドを観、モナドの位相を読む、または或る位相からモナドの二面二様、両面両態を読むからである［註１］。即ち、モナドには何かを読まうと云ふ意志がある。

［註１］

位相といふ概念と私たちの生活の関係については『縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（１）：I 縄文紀元日本語論』（もぐら通信第１０８号）の「（３）漢字とひらかな・カタカナの関係」の章にて詳述しましたので、お読み下さい。

４.３　ネット・モナド（personal）の定義

この両面両態を有するモナドがネット上にある場合に、これをネット・モナドと呼ぶことにします。

ネット・モナドの定義
ネット・モナドとは、モナドのうち、ネット（論理層）に存在するモナドである。

［補足説明］
論理層については、「二階層戦争論」として『Mole Hole Letter（２１）：二階層戦争論~時代と世界のための処方箋~MADE IN JAPAN』（もぐら通信第１０４号）より引用して補足説明とします。二階層戦争論を考へるための分類をご覧ください。ダウンロードはhttps://docdro.id/3BB4svX

20190612
oiya iwata

二階層戦争論を考へるための分類

論理層	ネット地勢学	国境なし	地勢動態論	中央絶対集権型放射状topology	並行四辺形に掛けのtopology	第三項の階層	超越論	汎神論的存在論	通信技術戦争1
物理層	地政学	国境あり	地政静態論	一神教のtopology	大地母神崇拝のtopology	二項対立の階層			通信技術戦争2
				中華人民共和国	日本帝国				

論理層	ネット・ヘゲモニスト	GAFA	プラットフォーマー1	ネット・ヘゲモニー論（ネット覇権論）	ネット・モナド論（＊＊）	モナド・メディア論1（＊＊）	ネット政治・ネット経済批評	第二次冷戦（Cold War）1	第二次COCOM1	第三次世界大戦1
物理層	ヘゲモニスト	近代国家	プラットフォーマー2	ヘゲモニー論（覇権論）	社会モナド論（＊）	モナド・メディア論2（＊＊）	政治・経済批評	第二次冷戦（Cold War）2	第二次COCOM2	第三次世界大戦2
論理層	目に見えない戦争（透明な戦争）	存在の戦争	形而上の戦争		（＊）モナドの定義：モナドとは社会を構成する全ての価値の単位である。モナドは大小に、全体と部分に、１か多数かに拘らず全て等価で遍在する。		（＊）社会の定義：社会とは民主主義（政治体制）と資本主義（経済体制）からなる世の中のことである。		（＊＊）ネット・モナド論とモナド・メディア論は、今私の構想してゐるネット・メディア論の中心をなすメディア論の一部です。	
物理層	目に見える戦争	現存在の戦争	形而下の戦争							

ネット・モナド論および、超越論とtopologyとライプニッツの関係に言及した箇所を『縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（１）：I 縄文紀元日本語論』（もぐら通信第１０８号）より引用して、１７世紀の哲学者ライプニッツの『モナド論』に想を得た私のネット・モナド論が、私たちの位相史観または鏡史観の上でどのやうな位置にあるのかを簡単に振り返つた上で、この章の本題に入ります。

「安部公房の存在の小説群が事実としてさうであるやうに［註５］、高天原に始まる私た ち日本人の民族としての歴史は連続的な変形の歴史だといふことができますし、さう歴史を観ることができる。とすれば、それは時間を捨象した、そもそも時間の存在しない 位相史だといふことになり、私たちの歴史は（実は歴史ではなく）、位相繰り返し史、 位相転換史、位相交替史であると云ふことになります。これはヘーゲルの歴史観を全面的に徹底的に否定する対極のものの歴史観（と敢へて言ひませう）です。否定すると云 へば否定することになり

ますが、しかし、ヘーゲルの歴史観とはそもそもご縁のない無関係な史観だと云ふ方が、争ひがなくて良いやうに思ひます。私のネット・モナド論 は、勿論１７世紀のバロックの哲学者にして数学者ライプニッツのモナド論に想を得たものです。この極東の島国から眺めれば、ヨーロッパ自身の１７世紀のバロックの世界観［世界は差異である］を否定し、言語再帰性発見の１８世紀（再帰哲学）を否定して（ショーペンハウアーに倣つて云へば仮令（たとへ）ヘーゲルのやうな詐欺師（Scharlatan）が出てドイツの若者たちの間に流行して猖獗を極めたにせよ）、（私の東ドイツ滞在での見聞から言つて）ヨーロッパの歴史を人工的に、即ち暴力的に中世に戻さうとしたマルクス主義は、やはり、ヨーロッパにとつては絶対悪だと云ふ以外の言葉を私は知りません［註２］。

［註５］「『デンドロカカリヤ』論（前篇）」（もぐら通信第５３号）にて詳述しました。」

［註２］
一体、キリスト教の教義がどれだけ深くその後も今に至るまでのヨーロッパの各民族、各国家、各人に影響を及ぼしてゐて、それが虚無主義（ニヒリズム）になり、更に思想性を喪失して、流行のカルトになり果てて荒廃した状態に此の地域がなつてゐるかは『サンチョ・パンサを求めて（４）：ヨーロッパの環境問題終末思想カルト』（もぐら通信代１０９号）にて詳述しましたの、これをご覧下さい。

（続く）

縄文紀元論
Topologyで日本人を読み解く（２）
Intermezzo
何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？

目次

Ｉ 縄文紀元日本語論
１。日本語と漢語の関係
（１）言葉と概念と文字の関係
（２）音義と日本語の概念の関係
（３）漢字とひらかな・カタカナの関係
（４）音義と五十音表の関係
（５）有文字文明と無文字文明

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？

２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か
３。文字についての禁忌（タブー）
４。ひらかなとは何か
５。カタカナとは何か
６。ひらかなとカタカナの使ひわけの規準（クライテリア）
７。五十音表は何故どのやうに生まれたか
８。和漢混淆文とは何か

II 《わたし》とは何か、《わたし》は何処にゐるか
１。安部公房固有の話法「僕の中の「僕」」について
２。海外の数学者の認識する扇といふ名前のtopologyの実例
３。《わたし》は何処にゐるか
４。《わたし》は、宇摩志葦牙比古遅（うましあしかびひこぢ）の神である
５。宇摩志葦牙比古遅神とは何か
６。超越論のおさらひ
７。超越論で伊勢物語を読む
８。みやびとは何か：みやびの概念
９。現代にみやびの概念を適用する

III 超越論とtopologyの関係：全ての道は高天原に通ず
１。日本民族の哲学と数学
２。神道とは何か

IV Topologyで縄文土器を読み解く
１。紋様とは何か
２。縄文土器の構成要素
３。縄紋は縄目と渦巻き紋様で出来てゐる
４。縄文土器は三階層で出来てゐる
５。縄文土器には開口土器と閉口土器の二種類がある
６。縄文土器は私たちの宇宙観を体現してゐる
７。メディア（媒体）としての縄文土器
８。弥生式土器は二階層で出来てゐる
９。メディア（媒体）としての弥生式土器
１０。縄文土器と弥生式土器の関係（topologicalな連続性）：３（奇数）から２（偶数）へ
１１。銅鐸は７階層で出来てゐる
１２。縄文土器の政治と弥生式土器の政治：土器と政治の一体と分離：銅鐸とは何か１
１３。縄文土器の経済と弥生式土器の経済：土器と経済の一体と分離：銅鐸とは何か２

IV ２１世紀の現代に縄文土器はどのやうに生きてゐるか
VII 二十世紀の幕を閉ぢ、２１世紀に生きるための結語

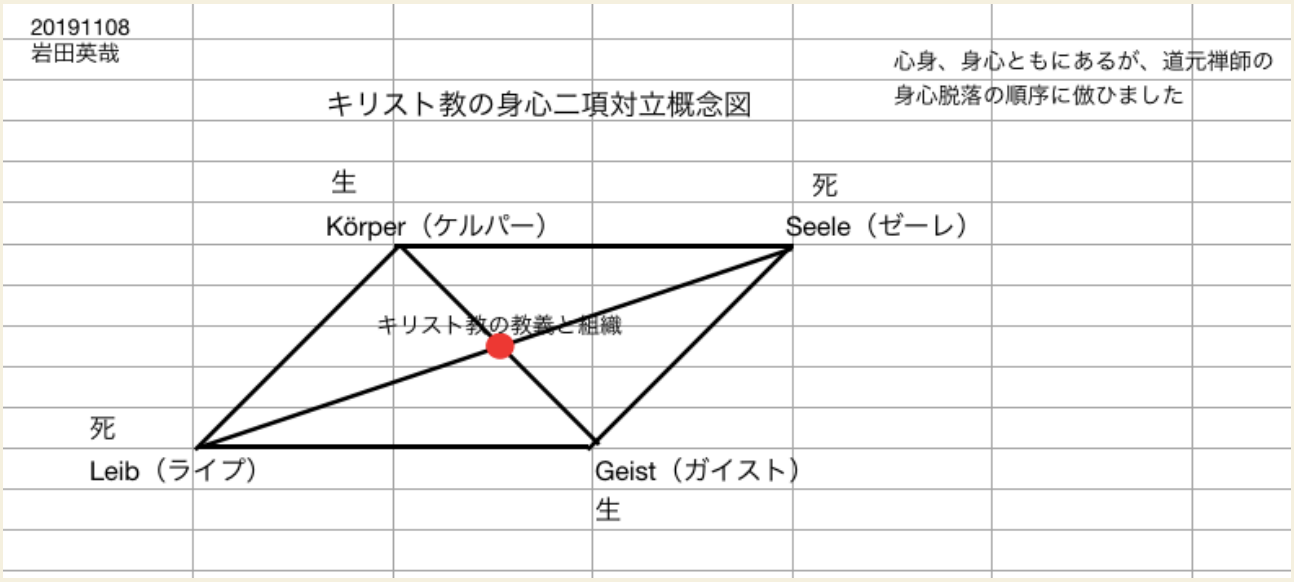
青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字は此れから論じる章

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？

かういふ話から始めたい。ドイツ語の対語と対概念の話です。ドイツ語に次の二つの対句と言ひたいやうな対語が二つあります。この対語二組の比較をすると掲題の問ひに答へることができるのです。

1. Körper und Geist（ケルパー・ウント・ガイスト）
2 Leib und Seele（ライプ・ウント・ゼーレ）

これは、私がドイツ文学や哲学の文章を読んでゐて、知らず知らずのうちに習い覚えた対概念ですが、ドイツ人は肉体と精神とか、肉体と魂とか、精神と魂とか、これら相互の関係を此の二つの対概念で理解をしてゐるのです。これを、私たちの超越論といふ二項対立否定論理のネットワーク図に入れて図解をすると次のやうになります。



1. Körper und Geist（ケルパー・ウント・ガイスト）
Körper （ケルパー）といふのは肉体であり体です。Leib（ライプ）も体ですが肉体とは訳せないのは、これに死体の意味、英語でいふbodyの意味があるからです。

英語ではbodyは肉体と訳すことができて同時に死体の意味も有しますが、ドイツ語と日本語の間には、英語と日本語の間にある関係はそのまま移植することができない。といふ、このやうな隙間に言語間、民族間の誤解が生まれる。

そして、 Körper （ケルパー）の対語対概念はGeist（ガイスト）、精神です。今改めてこれらの言葉を眺めて見れば、 Körper （ケルパー）が肉体と訳せても死体とは訳せないや

うに、これは生きてゐる体のことで、その意味での肉体といふ訳語の選択になつてゐることが判る。ドイツ人がボディ・ビルディングをするときにはLeib（ライプ）ではなく、Körper （ケルパー）を鍛へると表現することになるわけです。

これに対して、

２。Leib und Seele（ライプ・ウント・ゼーレ）
Leib und Seele（ライプ・ウント・ゼーレ）といふ対語対概念は、Leibが死体と訳することができるやうに、それではSeele（ゼーレ）、魂は死んでゐるのかといふと、さういふことではありません。これはヨーロッパでは、古代ギリシャからの議論の種で、人間は死んでも、即ちKörper （ケルパー）がLeib（死体）になつても、魂の不死を論ずるのは、プラトンの描くソクラテスの対話に顕著です。しかし、Seele（ゼーレ）といふ言葉はどこか死に近しい言葉なのでありませう。さうでなければ、死後も生きてゐて死なないのだといふ議論の発端にSeele（ゼーレ）があるわけがないからです。

このやうに、Seele（ゼーレ）は安息、静謐、静寂、静けさに概念連鎖してゐる。これに対して、Geist（ガイスト）は、活動、苦しみ、責苦、場合によつては（生命に対しては毒も薬の内といふ意味での）毒の役割を果たしてゐる。

そして、とはいへ、Körper （ケルパー）がGeist（精神）の対語であれば、前者が活発な生命の活動であるやうに、後者もまた活発な生命の活動であるでせう。確かに、Geist（精神）が対象とするのは、如何に辛辣であり厳しい批評をするにしても、生命であり生活であり人生であり、ドイツ語ではこれら一語で云ふLeben（レーベン）、英語のlife（ライフ）であるからです。

これに対して、このやうに考へ来れば、Leib und Seele（ライプ・ウント・ゼーレ）といふ対語は、死に関する対語であり対概念であるといふことが分かります。今ネットで検索すると、ドイツのフランクフルトにLeib und Seele（ライプ・ウント・ゼーレ）といふ名前のレストランがあります。

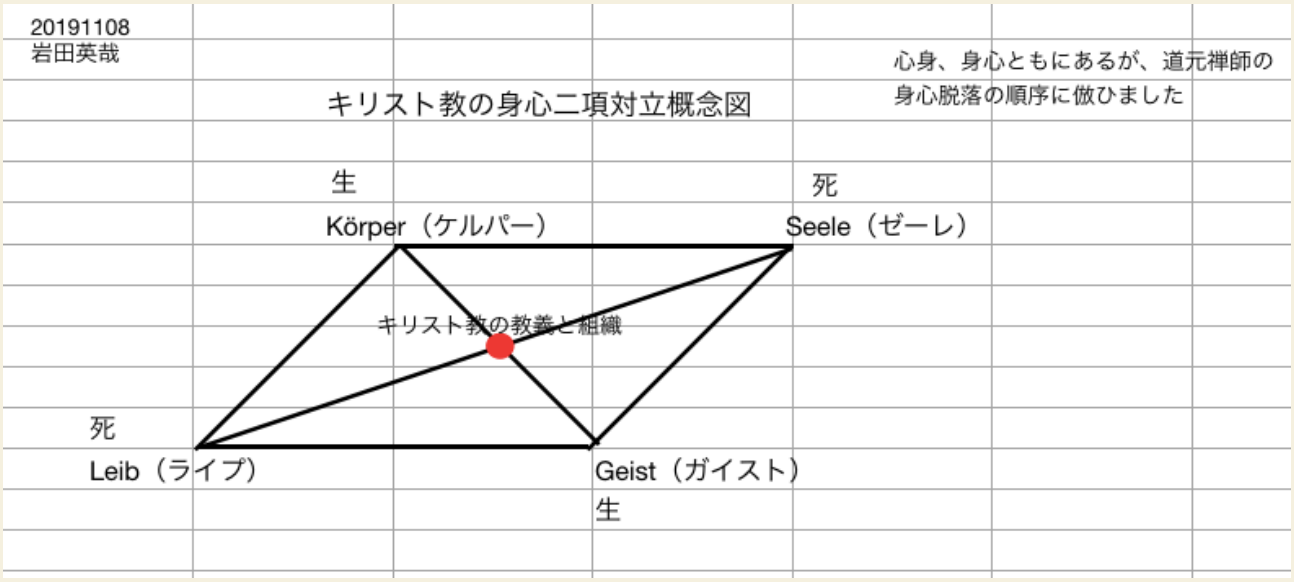
レストラン（restaurant）の原義は、疲れを癒し、生命を恢復（restore）することですから、疲れた人が来て、食事をしてまた疲れを癒し、命を恢復して日常の時間の中へと戻つて行く、そのための場所といふことですから、確かにSeele（ゼーレ）は、食事と共に、これを契機にして、復活と魂の不死を証明する場所でもあるといふことに、キリスト教のこれら対概念ではなります。

日本語ならば、薬膳と云へば、それで済むのではないかと思はれるが、如何か。

かうして考へて来ますと、イエス・キリストといふ人物が最後の晩餐を高弟たちと摂るといふのは、この人間の人生行路の筋道としては、食事をすることが死後の命の復活と再生の秩序正しい順序であつたといふことになります。即ち、このキリスト教の開祖の魂（Seele：ゼーレ）の不死と、死体(Leib：ライプ）の消失によるKörper （ケルパー）再生の可能性の肯定と、それから此の消極的な肯定を根拠にした、イエス・キリストの精神（Geist：ガイスト）のやはり死後も生きてゐることの肯定が、この最後の晩餐で既になされてゐたと解釈することができます。それほどに、その後のキリスト教のあり方にとつて、この食事は重要であり且つ本質的な食事であつた。有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画も、この視点で観れば何が見られるものか、機会があれば料理共々論じてみたい。

これらのドイツ語は、１６世紀にマルティン・ルターが古代ヘブライ語と古代ギリシャ語から直接ドイツ語に翻訳したことによつて生まれたドイツ語の対句対概念ですから、ユダヤ教の教徒もまた同様の対句対概念を、キリスト教徒と共有してゐるに違ひない。

さて、ここで何が問題かといふと、私たちの上記の超越論に基づくtopologyに依るネットワーク図といふ接続と変形の幾何学的図形によれば、キリスト教と其の教義と其の教義を普及させる教会組織は四本の線の交差点にあつて、これら四本の線による結合関係を、従ひ、四つの各点のこれら四つの言葉と二組の対句対概念を絶対命令によつて支配してゐるといふことなのです。あるひは、基督教会の教義が正しければ、ここにキリスト教の唯一絶対神Godが立つてゐると考へても良い。ダウンロードは：



この図を見ながらマルクス主義について解ることは次のことです。

（１）マルクスは徹底的な唯物論であり、キリスト教を否定しましたから、死後を考へる端緒となるSeele（ゼーレ：魂）も当然に否定した。といふことは、

（２）その対概念であるLeib（ライプ：死体）を、マルクス主義者は殺すために肯定した。といふことは、
（３）積極的にKörper （ケルパー）を否定し、虐殺することに道徳も何もないといふ理屈になつた。さうであれば、
（４）Körper （ケルパー）の対概念であり、生命の肯定を前提に成り立つ筈のGeist（ガイスト：精神）も否定をした。それ故に、
（５）「共産党宣言」の冒頭で、Geist（ガイスト：精神）の意味の一つである亡霊といふ意味で用ひて、ヨーロッパ近代文明に対する共産党と共産主義の位置を、自らさう呼んだ。

といふ物事の順序になります。

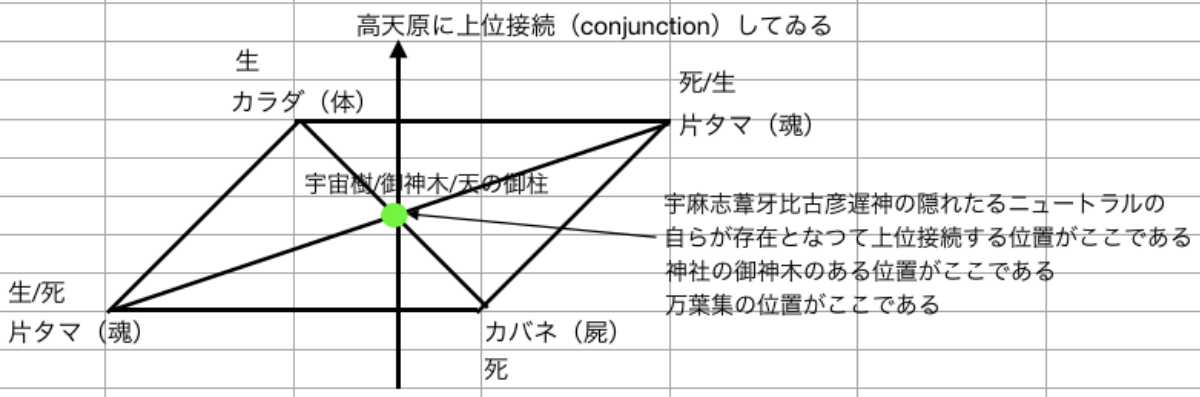
ヘーゲルが図中の交差点に「絶対精神」なるものを置いたのに対して［註１］、マルクスはこれを亡霊の位置に貶めて四辺の隅に追ひやり、ヘーゲルの「絶対精神」の代はりに共産党を置いたといふことになります。

［註１］
ヘーゲルの弁証法が中世スコラ哲学による唯一絶対神の存在証明のための「同一時間内不定立３基準」の意匠を変へた焼き直しであることは『安部公房とチョムスキー（１）』（もぐら通信第７０号）、『安部公房のアメリカ論 （３） ~贋物の国アメリカ~ドーナツとは何か』（もぐら通信第８０号）の特に［註４］、『安部公房とチョムスキー（８）』（もぐら通信第８１号）および『安部公房とチョムスキー（９）』（もぐら通信第８２号）にて論証した通りです。

これに対して、私たちの縄文紀元のネットワーク図は、同じ形式ととつてゐても、次に描いて示すやうに全く異なつてゐます。何故ならば、交差点に立つてゐるのは、宇宙樹であり、御神木であり、高天原０または高天原１ならば、宇麻志葦牙比古彦遅神であるからです。この神様は高天原０に現れて高天原１が成ると直ぐにお隠れになるので、安部公房の読者には周知の通りニュートラルな存在でありますから、その故に高天原１の交差点に隠然とゐまします、ゐましますとは哲学用語と思へば存在してゐるわけです。私たちの本来の言葉で此の縄文紀元の超越論のネットワーク図を描くと次のやうになります。ダウンロードは：https://docdro.id/nE69GLG

20191108
岩田英哉

神道の超越論の二項対立否定概念図



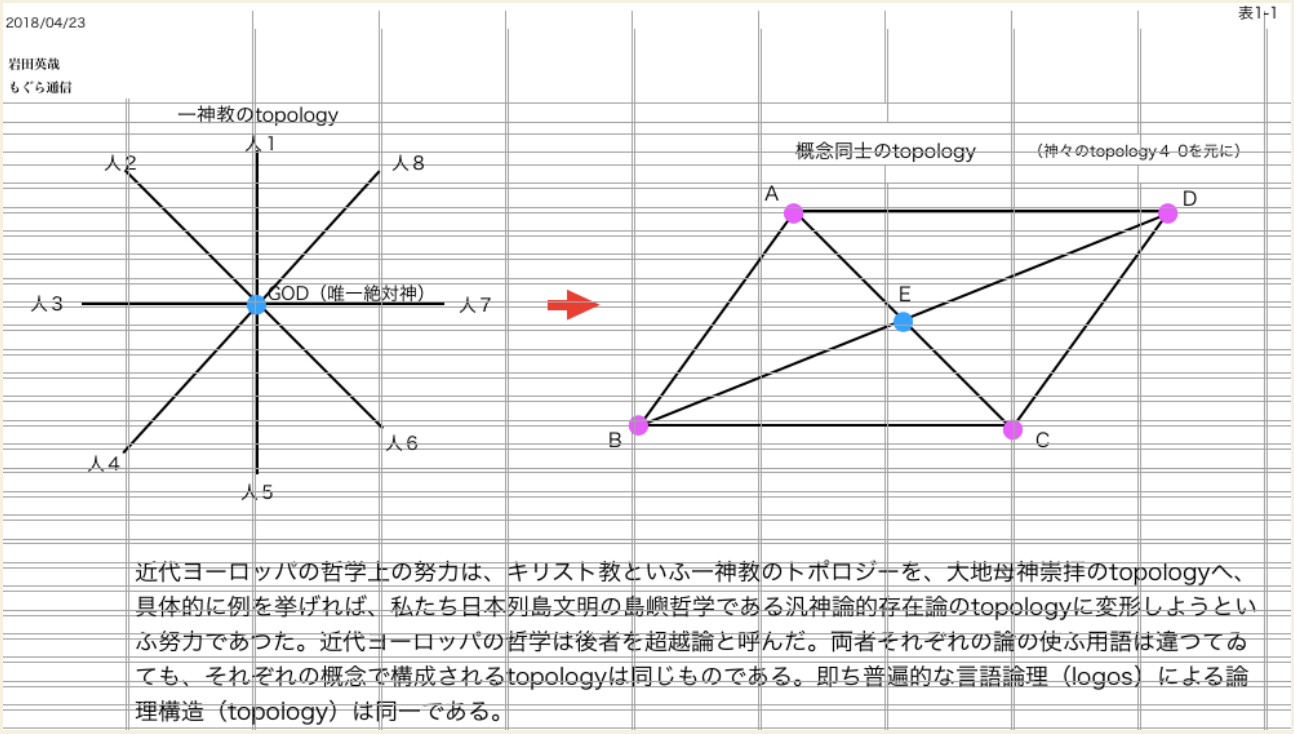
片タマ（魂）同士は超越論と/のtopologyによつて等価交換が可能である。二つの連鎖で一対であり、一つ（即ち存在）である。お盆に死者の魂（片タマ）はもう片方の片タマに回帰する。タマとは勿論完璧なる玉であり珠であり珠玉である。この片タマの姿が勾玉（マガタマ）であるといふことは『Mole Hole Letter（X）：超越論（５）』（もぐら通信第８５号）にて解説した通りです。万葉の一つ一つの葉つばの片葉が語る片方といふ意味は、一つのタマが半分になるといふのではなく、機能として相互補完的に片方づつだといふ意味です。

さて、主題に掲げた問ひ「何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？」といふ問ひに答へませう。

明治維新以来１５０年、私たちは謂はば敵の土俵で戦つて来たのです。敵の土俵でのルール（規則）は敵の決めたルールですから、当然最初から私たちはマイナスの負荷（ハンディキャップ）を背負つて戦はねばなりませんでした。それでは苦戦しますし、近代の歴史の示す通りに当然に負けることもあつた。しかし、この問ひに答へることで私がお伝へしたかつたことは、自分の土俵に敵を載せたら如何なるか？といふことです。私たちの土俵でのルール（規則）は私たちの決めたルールですから、当然最初から私たちはプラスの立場で有利に戦ふことが出来、百戦百勝といふ結果になるでせう。力士がレスラーとリングの上でレスリングの規則で闘つたら圧倒的に不利なやうに、しかし逆にレスラーをあの国技館の相撲の土俵の上に載せて、相撲のルールで闘つたら、圧倒的に力士の方が有利である。といふのと同じ理屈です。

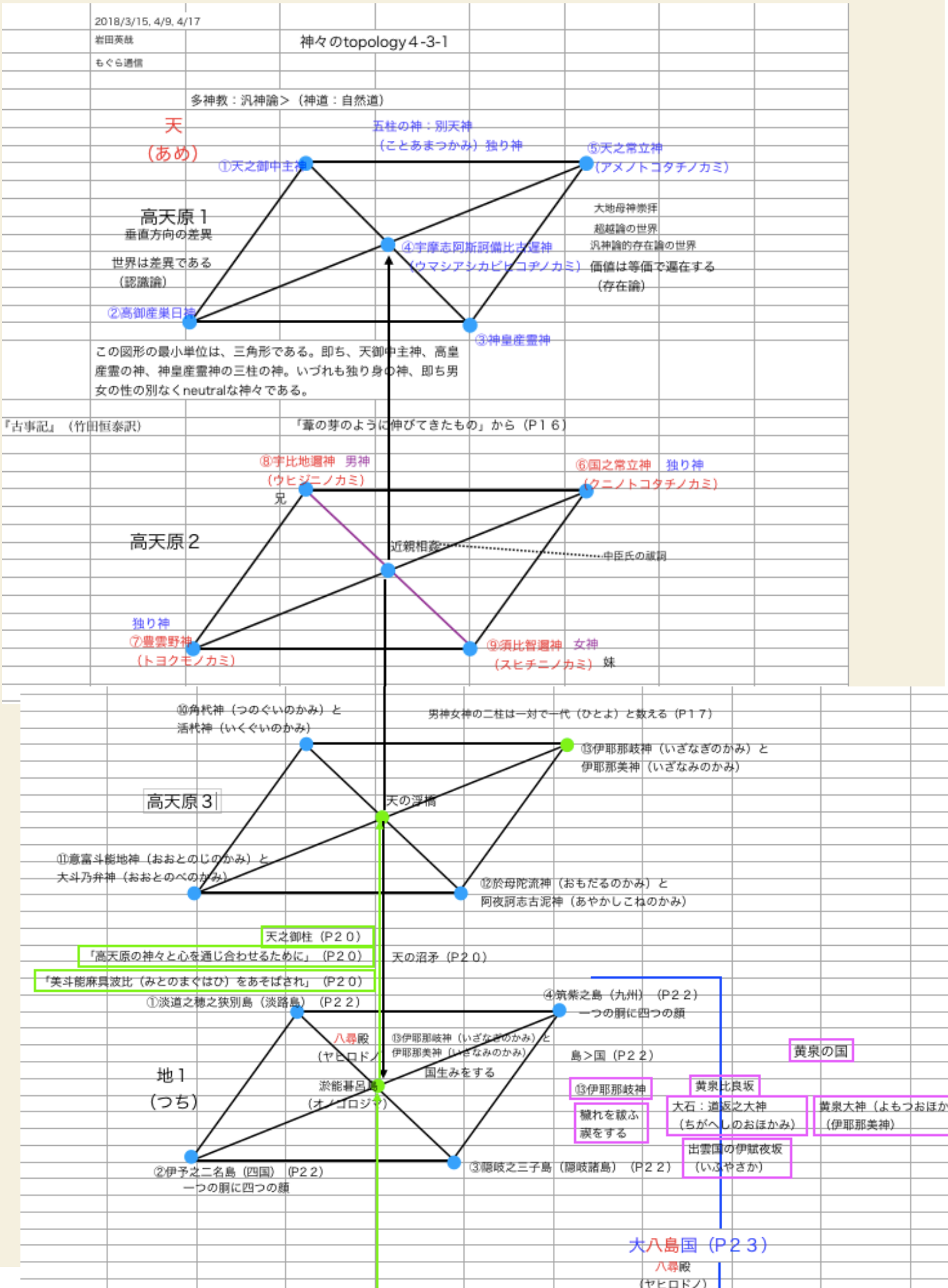
ここで上掲した超越論のネットワーク図は諸処既述の通り縄文紀元の私たちの哲学と数学（topology、一筆書き）の論理ですから、この土俵に載せて相手の弱点を突く、といつても勿論悪意なくといふ意味ですが、さうやつて一層に正々堂々と戦ふことが、２１世紀にはできることでせう。

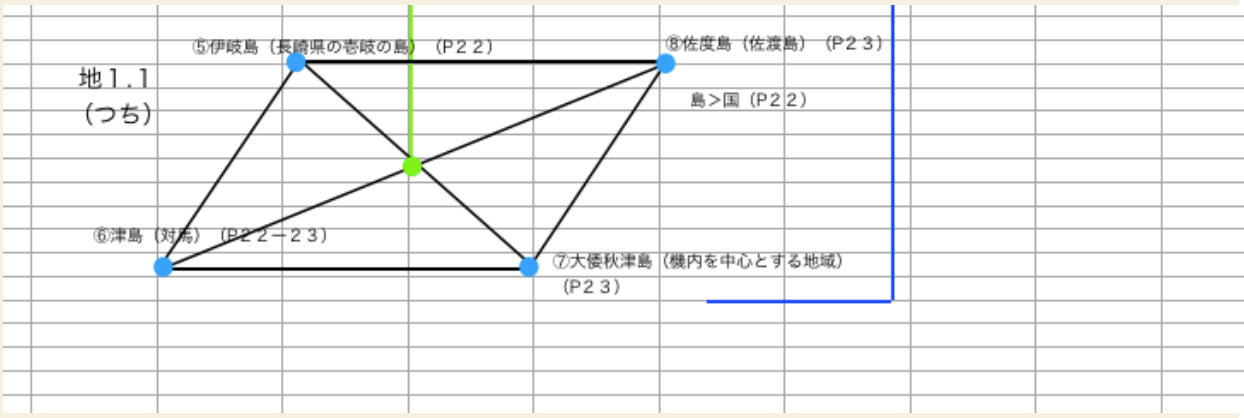
主題に掲げた問ひ「何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？」といふ問ひ対しては、同じことを次のネットワーク・トポロジーの遷移図を以て示して、私の回答と致します。なぜなら、この１７世紀以来の４００年間欧米白人種キリスト教との願ひ求めたるところは、意識的にせよ無意識的にせよ、左の一神教のトポロジーを去り、右の私たちのトポロジーに移行するといふことであつたからです。



居心地の良い日本の温泉に浸かつてゐるあなたが、何も好き好んで大陸の砂漠の中に、たとへオアシスがあるとは云へ、引つ越しをしたいとは思はないでせう？

日本の国の生まれた場所が、垂直方向といふ時間の存在しない差異に淵源するといふ論理的な事実を叙述してゐる民族の原典『古事記』の冒頭を解読して図解した、私たちの思考論理と感情と生活の、縄文紀元のtopologyを再掲します。本論考既述のことと併せて読み、各自ご研究下さい。以下の図が解説と共に掲載されてゐる『安部公房とチョムスキー（８）』（もぐら通信第８１号）のダウンロードは：https://www.docdroid.net/xI7ha5G/81.pdf


2018/3/15, 4/9, 4/17
岩田英哉
もぐら通信
神々のtopology４-3-1
多神教：汎神論＞（神道：自然道）
天
（あめ）
五柱の神：別天神
（ことあまつかみ）独り神
①天之御中主神
⑤天之常立神
（アメノトコタチノカミ）
高天原１
垂直方向の差異
世界は差異である
（認識論）
大地母神崇拝
超越論の世界
汎神論的存在論の世界
④宇摩志阿斯訶備比古遲神
（ウマシアシカビヒコヂノカミ）
価値は等価で遍在する
（存在論）
②高御産巣日神
③神皇産霊神
この図形の最小単位は、三角形である。即ち、天御中主神、高皇産霊の神、神皇産霊神の三柱の神。いづれも独り身の神、即ち男女の性の別なくneutralな神々である。
『古事記』（竹田恒泰訳）
「葦の芽のように伸びてきたもの」から（P１６）
⑧宇比地邇神　男神
（ウヒジニノカミ）
兄
⑥国之常立神　独り神
（クニノトコタチノカミ）
高天原２
近親相姦
中臣氏の祖詞
独り神
⑦豊雲野神
（トヨクモノカミ）
⑨須比智邇神　女神
（スヒチニノカミ）妹
⑩角杙神（つのぐいのかみ）と
活杙神（いくぐいのかみ）
男神女神の二柱は一対で一代（ひとよ）と数える（P１７）
⑬伊耶那岐神（いざなぎのかみ）と
伊耶那美神（いざなみのかみ）
高天原３
天の浮橋
⑪意富斗能地神（おおとのじのかみ）と
大斗乃弁神（おおとのべのかみ）
⑫於母陀流神（おもだるのかみ）と
阿夜訶志古泥神（あやかしこねのかみ）
天之御柱（Ｐ２０）
『高天原の神々と心を通じ合わせるために』（Ｐ２０）
天の沼矛（Ｐ２０）
『美斗能麻具波比（みとのまぐはひ）をあそばされ』（Ｐ２０）
①淡道之穂之狭別島（淡路島）（Ｐ２２）
④筑紫之島（九州）（Ｐ２２）
一つの胴に四つの顔
八尋殿
（ヤヒロドノ）
⑬伊耶那岐神（いざなぎのかみ）と
伊耶那美神（いざなみのかみ）
国生みをする
島＞国（Ｐ２２）
黄泉の国
地１
（つち）
淡能碁呂島
（オノゴロジマ）
⑬伊耶那岐神
黄泉比良坂
穢れを被ふ
禊をする
大石：道返之大神
（ちがへしのおほかみ）
黄泉大神（よもつおほかみ）
（伊耶那美神）
出雲国の伊賦夜坂
（いふやさか）
②伊予之二名島（四国）（Ｐ２２）
一つの胴に四つの顔
③隠岐之三子島（隠岐諸島）（Ｐ２２）
大八島国（Ｐ２３）
八尋殿
（ヤヒロドノ）


⑤伊岐島（長崎県の壱岐の島）（P２２）
⑧佐度島（佐渡島）（P２３）
地１.１
（つち）
島＞国（P２２）
⑥津島（対馬）（P２２－２３）
⑦大倭秋津島（機内を中心とする地域）
（P２３）

連載物・単発物次回以降予定一覧

（１）安部淺吉のエッセイ
（２）もぐら感覚２３：概念の古塔と問題下降
（３）存在の中での師、石川淳
（４）安部公房と成城高等学校（連載第８回）：成城高等学校の教授たち
（５）存在とは何か〜安部公房をより良く理解するために〜（連載第５回）：安部公房の汎神論的存在論
（６）安部公房文学サーカス論
（７）リルケの『形象詩集』を読む（連載第１５回）：『殉教の女たち』
（８）奉天の窓から日本の文化を眺める（６）：折り紙
（９）言葉の眼１２
（１０）安部公房の読者のための村上春樹論（下）
（１１）安部公房と寺山修司を論ずるための素描（４）
（１２）安部公房の作品論（作品別の論考）
（１３）安部公房のエッセイを読む（１）
（１４）安部公房の生け花論
（１５）奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
（１６）安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
（１７）安部公房の論理学〜冒頭共有と結末共有の論理について〜
（１８）バロックとは何か〜安部公房をより良くより深く理解するために〜
（１９）詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』〜安部公房の定立した問題とは何か〜＊
（２０）安部公房の詩を読む
（２１）「問題下降」論と新象徴主義哲学
（２２）安部公房の書簡を読む
（２３）安部公房の食卓
（２４）安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
（２５）安部公房の女性の読者のための超越論
（２６）安部公房全集未収録作品
（２７）安部公房と本居宣長の言語機能論
（２８）安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
（２９）安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
（３０）安部公房と古代の神々：伊弉冊伊弉諾の神と大国主命
（３１）安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
（３２）リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（３３）言語の再帰性とは何か〜安部公房をよりよく理解するために〜
（３４）安部公房のハイデッガー理解はどのやうなものか
（３５）安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
（３６）安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
（３７）『さまざまな父』論〜何故父は「さまざま」なのか〜
（３８）『箱男』論 II：『箱男』をtopologyで解読する
（３９）安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
（４０）語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエィター』
（４１）安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
（４２）安部公房の超越論
（４３）安部公房とバロック哲学
①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
③安部公房とジャック・デリダ：郵便的（postal）意思疎通と差異
④安部公房とジル・ドゥルーズ：襞といふ差異
⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
（４４）安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人（strangers in the night）
（４５）安部公房とバロック文学
（４６）安部公房の記号論：《 》〈 〉（ ）〔 〕「 」『 』「……」
（４７）安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説（１）
（４８）安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説（２）

（４９）『密会』論
（５０）安部公房とSF/FSと房公部安：SF文学バロック論
（５１）『方舟さくら丸』論
（５２）『カンガルー・ノート』論（済み）
（５３）『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
（５４）言語とは何かII（済み）
（５５）エピチャム語文法（初級篇）
（５６）エピチャム語文法（中級篇）
（５７）エピチャム語文法（上級篇）
（５８）二十一世紀のバロック論
（５９）安部公房全集全３０巻読み方ガイドブック
（６０）安部公房なりきりマニュアル（初級篇）：小説とは何か
（６１）安部公房なりきりマニュアル（中級篇）：自分の小説を書いてみる
（６２）安部公房なりきりマニュアル（上級篇）：安部公房級の自分の小説を書く
（６３）安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論〜『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
（６４）詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観（済み）
（６５）安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
（６６）『方舟さくら丸』の図像学（イコノロジー）
（６７）言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
（６８）言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
（６９）言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
（７０）Topologyで神道を読む（１）：祓詞と祝詞と結界のtopology
（７１）Topologyで神道を読む（２）：結び・畳み・包みのtopology

［シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観］
（７１）超越論と神道（１）：言語と言霊
（７２）超越論と神道（２）：現存在（ダーザイン）と中今（なかいま）
（７３）超越論と神道（３）：topologyと産霊（むすひ）または結び
（７４）超越論と神道（４）：ニュートラルと御祓ひ（をはらひ）
（７５）超越論と神道（５）：呪文と祓ひ・鎮魂
（７６）超越論と神道（６）：存在（ザイン）と御成り
（７７）超越論と神道（７）：案内人と審神者（さには）
（７８）超越論と神道（８）：時間の断層と分け御霊（わけみたま）
（７９）超越論と神道（９）：中臣神道の祓詞（はらひことば）をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
（８０）三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
（８１）安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
（８２）『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
（８３）バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
（８４）安部公房とチョムスキー
（８５）三島由紀夫のドイツ文学講座
（８６）安部公房のドイツ文学講座
（８７）三島由紀夫のドイツ哲学講座
（８８）安部公房のドイツ哲学講座
（８９）火星人特派員日本見聞録
（９０）超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
（９１）「『使者』vs.『人間そっくり』」論

編集後記

●表紙：日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（５）：包む：褌が大砲を包むといふ由来は１８の歳に国語の先生に教はつて以来、私の念頭を去ることはありませんでした。二段活用などといふものは忘れても余談は忘れぬといふこれが教育には大切なのである。●『周辺飛行』論（２２）：前回の最後にかかげておいた応用問題――周辺飛行１９：安部公房と三島由紀夫の交情を思ふ周辺飛行でした。今あらためて二人の対談『二十世紀の文学』を読み返すと、対談の水準の高さに驚きます。こんな対談を今の作家や評論家はできない。言葉と言葉の間、一文と一文の発話の間にある教養と努力の密度が異なります。再読をお薦めします。きつと世の安直なる対談本の類の売れ行きが落ちるだらう。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５２）：第２部 XXVII：”本当に、時間は存在するのだろうか、この破壊するものは。”：ここにも墓碑銘が、金山時夫が歌はれてゐる「終りし道の標べ」であることよ。●*Mole Hole Letter*（３０）：第三次世界大戦とは何か～EXIT帝国対中華帝国の戦争～：日本人の鈍感さ。これは生きるためには必要なnon-senseであるが、しかし、いい加減にしないと、火傷をしても熱くないといふので、また原爆を落とされても後の祭りであるぞよ。●サンチョ・パンサを求めて（４）：ヨーロッパの環境問題終末思想カルト：１８世紀の欧州の啓蒙主義から今に至るカルトの系譜が結局は共産主義の系譜であることが論証できてよかつた。ドイツ文学史、こんなもの何の役に立つのか？と思ひながら、それでも当時読んで、今でも時折紐解くとよくドイツ人の文学の次第が解るやうになつたといふ此の年季が生きました。●ネット・メディア論（３）：４。ネット・モナド論：一歩一歩論じて参りたい。大事な論考です。●縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（２）：Intermezzo　何故日本にはキリスト教徒が１％しかゐないのか？：この世の不思議の謎を解いたと本人は思つてゐるのですが、まあ、ご一読下さい。位相といふ概念を、ほら月を見てご覧、満ち欠けするだらう？あれを位相といふのだよ、と言つて一回で解る民族がどこにゐるものだらうかと途中で思ひながら書き終へました。何しろ私たちはこれを実感として生活の中で知つてゐるので、生理感覚としてtopologyを知つてゐる。これは実に凄いことです。

差出人：
贋安部公房
〒182-0003東京都調布市若葉町「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

次号の予告
1。『周辺飛行』論（２１）
2。安部公房の縄文紀元論（2）
3。私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
4。哲学の問題１０１（１１）：愛（Liebe：リーベ）
5。大久保房雄を読む（1）：文壇とは何であつたか
6。リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５３）
7。サンチョ・パンサを求めて（4）：ドーナツの穴になつた話

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、 安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら 本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、 高旗浩志様、島田雅彦様、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館 、コロンビア大学東アジア図書館、「何處にも無い圖書館」

【もぐら通信の編集方針】

１．もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
２．もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
３．もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
４．編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。

